
驕れ骸よ

路傍之杜鵑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

驕れ骸よ

【Nコード】

N0953V

【作者名】

路傍之杜鵑

【あらすじ】

復讐に命を懸ける男、その生き様を見詰める売女、頂点で嗤う男、不機嫌な女、欲に忠実な男、辻斬り、拳に誇りを持つ少年、己の正義を貫く男 近未来のトーキョーにおいて幾つもの人間が絡み合う群像劇。ハードボイルド、アングラ&ノワール。タイトルに*がついている場合、挿絵あり。

生還

終末の七日間と呼ばれる世界大戦が、地上から国という単位の集合体が奪って二百年。地上に張り巡らされた情報ネットワークが壊滅的な打撃を受けずにすんでいた分だけ、その復興は早かった。その復興に尽力したのは様々な企業であり、議会制民主主義が巨大企業による商業支配に取って変わったことにはある意味では当然だった。

都市単位での企業支配は都市の特性を生む。穀物系企業が支配する都市では穀物が安く手に入り、軍需産業が支配する都市では重火器や戦闘機械が発達し、それを輸出することにより利益を得ていた。そして壊滅したここ日本の首都東京の跡地に生まれた新たな巨大都市「トーキョー」は世界有数の経済規模を誇り、様々な価値観と文化が交わる国際都市へと変貌していた。だが同時に経済格差による差別が蔓延り、その居住区画ですら中流階級以上が住むアップパーグラウンドと下流階級が住むスラムに隔離されていた。

「収監されると死体でしか出られない」と評される第62監獄から生還し、ある目的を果たす為スラムに舞い戻った男がいる。

男の名は骸、その目的は五人の男への復讐。

喧嘩

己の拳に掛けるそれは誇りだ。相手を屈服させることで得られる優越感は一過性のドラッグに過ぎない。だが、己の誇りすら守れない糞に零落れるのはごめんだ。

対峙する男が二人。

一人は隻眼隻腕の壮年。刈り上げた黒い短髪、細く引き締まった体躯、アーミーパンツにアーミーブーツ、残された左腕には特殊警棒が握られている。さながらその雰囲気は、蠍。

もう一人は金髪の若者。中肉中背、黒いシャツにLee 2000 - 42 T A L O N、ドクターマーチンのロングワーク。その眼に宿るのは業火の如き怒り。さながら彼は焰。

「……焰よ、お前の誇りなんぞ程度は知れている」

「それは俺が決めることだ」

隻眼隻腕の男は手に握った特殊警棒で肩を叩きながら、対面に立つ若者を睨んだ。ここは地獄の真っ只中、スラムイーストエリアの裏路地。

「蠍、貴様、何様のつもりだ」

「俺は俺様だ」

「今のお前には何の誇りも感じられない。ハロルド・ファグナーと遣り合っていた頃のお前はどこにいった」

二人を照らす街灯は寿命が切れ掛かっているのかチカチカと点滅する。その点滅はまるで、今の蠍を示しているようだった。

「だが焰、貴様の誇りとて大したモノではない。女一人すら守れぬ貴様の無力こそ蔑め」

「俺の女を犯す理由にはならない」

「そうだな、だが貴様の無力は真実だ」

その引き締まった体躯に無駄は一切なく、隻眼にも関わらず隙もなく、隻腕に不安もない。

だが一つだけ、蠍に盲点があるとすれば、その傲慢なまでの驕りだ。焰にとってそれはたった一つだけ突くことが出来る、蠍の持つ最大の欠点だった。王は常に愚者によって殺される。

焰はゆっくりと両拳に黒い革手袋をはめた。そして黒いシャツの袖を手首まで下ろし、袖のボタンを留めると両腕は暗闇に溶けた。最低限度、準備は必要だ。特に蠍のような百戦錬磨と戦うのならば。

「さあ、始めようか」

蠍はゆっくりと特殊警棒を構えた。

焰は一瞬、瞼を閉じた。眼の裏に浮かんだのは蠍に何度も犯され、殴られ蹴られ誇りも尊厳も心の自由すらも奪われた、愛する女の虚ろな瞳。

眼を開いた瞬間、焰は烈風の勢いで蠍に向かって奔った。細かいステップを刻み、一直線に蠍に襲い掛かる。左拳で放った牽制は速度と連射を主眼に置き、威力は二の次だ。つまりこれで距離を測り、裂帛の右拳でケリを着ける。

蠍はその左拳を特殊警棒と腕であっさりを受け流す。そして腕を滑らせ、そのままの勢いで特殊警棒を焰の頭に叩き込もうとした。焰はそれを右手で受け止めると、一度距離を置く。

さすが百戦錬磨の蠍、焰の心理をあっさりと読んでみせた。無論、初撃でケリが着くなんぞ猿じゃあるまいし考えてもいない。ただ、この応酬で幾つかのことが分かった。

蠍は基本的に後の先を狙う。隻眼隻腕というハンデはかなり大きい。実力差と格を加味しても、わざわざ攻撃して隙を作る理由はない。つまり奴はこちらの攻撃を誘い、それに対応することで隻眼隻腕のハンデを消している。

「答える、蠍。何故、彼女を犯した」

「答えてやる義理はない。貴様に話す理由もない。真実が貴様の見える範囲に転がっていると思うな」

蠍の言葉に、焰は激しく齒軋りをした。そう言われてしまえば

言い返しようもない。真実が見えているのならば、こうして蠍螂を襲うこともなかっただろう。むしろ、彼女の有様に疑問を持ったからこそ、こうして蠍螂と対峙した。

目の前にあることこそが真実。いや違う、見えない何かこそが真実だ。それを見付けたくて蠍螂と対峙した。

焰は先手を取り続けるしかない。後の先は実力差があるからこそ手段。焰が狙ったとしても後手になるだけだ。両腕でガードをしながら身体を振り、細かいステップで突っ込む。もう一つ、蠍螂との戦いで犯してはならぬことは、半端な位置に立たない、半端な覚悟で打ち合わない、断固たる決意の上で心を折り意識を断つということだ。

早い左を特殊警棒で思い切り弾き、蠍螂は焰の懐に踏み込んできた。左を弾かれた為に上体を大きく開いてしまった焰の首筋に、蠍螂はその特殊警棒を叩き込む。

だがその瞬間こそ、焰が狙っていた瞬間。蠍螂の傲慢さは、この一撃で焰を倒せるという過信だ。

焰は叩き込まれる瞬間、首筋に全身全霊の力を込めた。如何に特殊警棒を使っていたとしても、人間の意識を断つ為には相当の力と絶妙なタイミングが必要だ。もらうことを覚悟した上での被弾ならば、一撃程度は耐えられる。

叩き込まれた一撃はそれでも一瞬意識が飛びそうなほどの衝撃だった。耐えながら焰は一步強く踏み出し、右の拳に全体重を掛けてそれを振り下ろした。その拳は蠍螂の顎に吸い込まれ、蠍螂はその強烈な一撃に後方数歩にたたらを踏んだ。

「……相打ち狙いか？」

「こうでも、しなけりゃ、貴様に、拳は、届か、ないん、でね……」

特殊警棒が叩き込まれた首筋が激しく痛んだ。どうも相当大きな傷を負ったらしい。軽く左腕を持ち上げるが、左腕は既に重く痛みそして痺れ始めていた。どうやら、左の鎖骨でも骨折してしまったのだろう。渾身の一撃を叩き込む為に背負った代償はかなり大きい。

「真理は常に虚実の奥にある。この意味が分かるな」

「……だから、戦うのを、やめると、でも、言うのか」

「貴様如きを叩きのめしたところで、俺には何の益もない」

焰はじつと蠍の顔を見詰め、そして嘲るかのように笑うと、こ
う吐き捨てた。

「俺が、恐い、のか、蠍……。あんたは、間違い、なく、俺を、
恐れて、いる……」

焰の嘲りを受け、蠍の隻眼が鋭く尖った。そして地面に向かい
血反吐を吐き捨てると、無造作にゆっくりと焰に近く。

「屑は救われないな、焰よ」

「屑は、貴様だよ、蠍……っ」

焰のたった一撃の拳で一体何が変わったのだろうか。実力差を考
えれば、ただ打ち合うだけでも無謀だったはず。だがそれでも一撃
に賭けてそれを狙った。叩き込まれた拳は、一体何を変えたのか。
運命、それとも宿命、宿業だったのか。

蠍が一歩進むと、焰は無意識に一歩下がる。気が付いた時には
背中にはフェンスが押し付けられていた。

睨み合う焰と蠍。誇りを失えば獣と同じだ。欲望のままに暴れ
喰い犯すそれは、最も純粋な野生だ。だが、それは拳を握る者にと
って最も恥ずべきことだ。

ふと、焰は気付く。

蠍は誇りを失った獣ではない。この一瞬だけでそれは十分に分
かった。ならばその誇り高き男が女を犯すだろうか。睨み付ける蠍
の眼の奥に光るそれは、明確な真理を語っていた。

それは焰にとって喜劇的な真実であり、そして現実だった。

彼女が誰に犯されたのか、それは分からない。ただ蠍ではない。
そして彼の名を騙った彼女は、自分に対して決して言えない秘密を
持っている。

「……くそつたれ、あの馬鹿女あ」

小さく呟いて、焰はその場に座り込んだ。折れた鎖骨の痛みが酷

く、身体から力が抜けてしまった。懐から安煙草を取り出し口に啜え、火を点ける。ゆつくりと紫煙を吐くと、蠐螬が「一本よこせ」を言い隣に座った。

ヤバい女に惚れたもんだ。こんな目に遭いながらも、焰は笑うことが出来た。それはあの女との関係が対等だからだ。あいつがヤバい女なら、自分はチンピラやゴロツキの類だ。

「……ちきしょう、一発入れるのに鎖骨と引き換えじゃあ勝負にならねえや」

空を見上げれば、そこにはまんまるで大きな月が二人を見て笑っていた。

「……奥歯が二本折れた」

蠐螬の慰めにもならない言い訳を聞いて、焰はさも可笑しそうに笑った。

仕方がない、負けは負けだ。

「次は負けねえよ」と言うと、蠐螬は「楽しみにしておく」と応えた。

転がる生き方も楽ではないのさ。

亡霊*

黄色で書き殴ったかのような「P・W」という文字を背中に背負い、その男は歩いていった。その黒いTシャツは異様に目立つ。綺麗な色落ちのジーンズはCAN'T BUST'EM DENIMのヴィンテージ。LevisでもLeeでもWranglerでもなく、それを選んだのは、彼がマイノリティを求めているからだ。REDWINGのロングワークは、かなり履き込まれていた。

とろりと霞んでいるその眼に映るのは、一体何なのか？

黒髪に黒縁のデザインフレームの眼鏡が、それを更に強くしている。

無意識に闇夜を好む。意識的に強気な女を愛する。情緒不安定気味な感情は薬で黙らせ、根強い誘眠障害は生玉葱のスライスでやり過ごす。情緒不安定は行動の邪魔だから薬で抑え込む必要がある。だが誘眠障害を睡眠薬で眠ってしまったえば下手を打つことがあるからだ。

と言つても、彼が情緒不安定や誘眠障害に陥った最大の要因は、長期間の監禁にある。

人間は社会で生きていく生物である以上、長期間の孤独に対しての抵抗力が薄い。監禁が長くなつていけばいくほど、幻覚幻聴などの精神疾患を発症してしまうことがよくあるのだ。

彼のケースもそれに近い。彼が少しだけ違う部分は、十年間の拘束で発症したのが、情緒不安定と誘眠障害だけだったということだ。この程度で生き延びたのだから、彼にしても文句を言う口もない。

トーキョーのスラムにある繁華街の裏路地。どう考えても危険なその場所を、彼はフラリフラリと歩いていた。角にいる数人の女は、どう見ても娼婦。その娼婦の隣に座っている男は売人だろうか。

「ねえ、骸。今日はあたいを買つてよ」

角から寄り、彼の腕に豊満な胸を押し付けた女が、妖艶に微笑つ

た。骸はじつと女の顔を見詰め、「お前は誰だ？」と問う。

「なんだい、忘れたのかよ。あたいだよあたい、椿」

女の顔を幾ら見詰めても、骸には誰だか分からなかった。ただそう言えば、椿という名前には聞き覚えがある。

強引にモーテルに歩き出す椿に、迷惑面でこう言った。

「今日は無理だ。用事がある」

「あ？ なぁにい？ あたいこっちの耳は聞こえ辛いさね」

実際に用事はあるのだが、どうも椿というこの女は離してくれそうもない。

綺麗な黒髪のショートボブ、鼻が少し低いのが残念だが整った顔立ち、豊満な胸、身体のラインを強調する70's ディスコファッション。

確かになかなか美味しそうだ。

「買うのはいいが、今は拙い。後で寄つてやるから待っている」

「嘘ばかり言うな。あなたの約束なんか信用できるかよ。その用事とやらを後回しにしなよ」

女は強気な方がいい。淑やかな女を口説くのも嬉しいが、やはり女はじゃじゃ馬に限る。しゃなりしゃなりされていても「お高く留まるな、この雌豚」と蹴り付けてしまいたくなる。

「俺が忘れていたら、お前がまた誘えばいいだろう」

「またここを通るのかい？」

「ああ、俺はこの辺の道はここしか知らないんだ」

「ふうん、本当だろうね？」

「なら手付けにこれをやろう」

懐からドラッグケースを取り出し、錠剤を三つ椿に渡す。すると椿は表情を綻ばせた。

「えへへ、ありがとさん。後で寄つてよ、約束だからね」

浮かれ気分で背中を向ける椿に、骸は視線を向けて小さく呟いた。

「……ビタミン剤でイケるのか。面白い奴だな」

骸はそのまま裏路地の闇の中に消えた。

トーキョーのスラムを支配するファグナー・ファミリーが、警察と取引をしたのは三ヶ月前だ。それはある事件の司法取引で、結果数人の財界人が逮捕され、そして数人の受刑者が釈放された。

暗闇に潜む骸の視線の先に、その釈放された受刑者の一人がいる。両手に花の状態で、女の乳房を強めに揉みしだき、品の無い顔で下品に笑っている。周囲に二人の強面が立ち、男を護衛しているようだ。下世話かもしれないが、あんなのがファグナーの有力者だとしたら、ファグナーの先は短そうだ。

骸はゆっくりと暗闇から歩き出した。ふらりふらりと、相変わらず足取りは怪しい。

リムジンの後部座席に乗り込もうとしていた男が、骸を見て視線を尖らせた。そして護衛をしている男達に、指で命令を下す。男達は互いの顔突き合わせた後に肩を竦め、骸に向かい鬱陶しそうに歩き出した。

裏で働いているワリにはこの二人、眼力は問題にならない程度のものしかないらしい。

骸はゆっくりと歩を進める。男達が直前に近づくと歩を止めて、無造作に懐に手をつ込んだ。

それを見た男の一人が応じるように手をつ込んだ。だが一瞬速く、骸は懐からガバメントを抜き、片方に対して無造作に二発撃つた。

一発は左胸、もう一発は首筋の頰動脈。それはあまりにも無造作で、あまりにも殺意の無い行動。殺すことに意味合いすら感じていない。自分を正当化する必要もない、そんな撃ち方だった。

撃たれた男がゆっくりと倒れるのを、もう片方の護衛は呆然と見ていた。

「……ハロルドに伝える。骸が帰ってきた、と」

骸がそう告げると男は色めき立ち、懐にあるリボルバーを抜いた。だが骸がまた無造作にガバメントを撃ち、それが右肩と左の鎖骨下に命中すると、その場に崩れ落ち膝を付く。

「伝言、頼んだからな」

骸はそう告げて、リムジンに向かいゆっくりと歩き出した。

リムジンに乗る男は、じっと骸を睨みつけていた。

リムジンを発進させようとした運転手を撃ち殺した後、骸はガバメントを構えたまま後部座席に乗り込んだ。女達が悲鳴を上げたが、それを男が制した。

「久しぶりだな、骸」

「元気そうで何よりだ、ロッド」

広いリムジンで対面に座り合う。互いに相手が獣だと理解していた。どんなに信頼することができたとしても、信用することはできない。そんな相手だった。

「……復讐か？」

「翠を殺したのは、お前達だ」

「仕方がないだろう？ 俺達は命令に逆らえないのだから」

「戯けるな。ならば何故、俺は10年間も監禁された？」

「それが、ハロルドの意思だったからだ」

「そうか」

骸はまた、無造作にガバメントの引鉄を引いた。弾丸は男の額に穴を開け、男は血と脳漿をぶちまけて死んだ。悲鳴を上げた女の片方をも撃ち殺し、絶句して失禁したもう一人には「舐める」と言い放つ。

その時、骸の眼には、強い欲望の色が灯っていた。

安椿

椿という女はファグナー・ファミリーの娼婦で、娼婦としてはあまり売れている方ではない。だがこの女はかなり強かで、自分を抱く男に対して強い睡眠薬を飲ませ、財布から金を抜くが、気に入った男には強い催淫剤を互いに飲み、思う存分愉しむ。

女としての完成度など高が知れている、その程度の女。

「全く、何が約束だい」

「なにさ、結局骸つて奴、来なかったの？」

シャワーを浴びてすっきりした後、膨れっ面でソファに座る椿に、ルームメイトのタイニイは楽しげに笑いながら話し掛けた。

一日の仕事が終わり、ゆったりとした時間が過ぎる。娼婦にとつての仕事上がりは、ほとんどが深夜か明け方だが、骸にすっぱかされた椿は、夜半前にアバルトメントに帰ってきた。

タイニイは椿よりも2歳年下の少年だ。

別段、椿とセクシャルな関係はない。何よりもタイニイはホモセクシャルだ。元々男を信用する性質ではない椿が、唯一信用している男でもある。こんな物騒な界限で女が生活しているのだから、こういう自衛の手段は必要になってくる。タイニイは極端なベビーフェイスだが、見た目よりも腕が立つのだ。

「大体なんだよ、あのドラッグ。ヤツても全然ハイになりやあしない」

椿が怒っている理由の一つは、やはりそれだった。ただそれでハイになるうとしていたということは、つまり骸をそこそこ気に入っていたのだろうとタイニイにも想像が付く。

「はいはい、仕方がないよ、姉さん。そいつも忙しいんだろうさ」

タイニイはやはり楽しげに笑い、椿にホットミルクを差し出した。椿はそれを受け取ると、一息に空けた。

ホットミルクには軽い鎮静作用がある。無論それはドラッグのよ

うな強いモノではなく、もつと優しくもつと自然なモノだ。

タイニイは基本的にドラッグを嫌う。反面で、こういうナチュラルなモノを好み、そしてそれをさり気なく椿に勧めてくれる。ただそれはあまりにも自然でゆったりとした効果しかない為、表面上、椿にはあまり効果が無い。

「お陰様であたいは股干上がつまつたよ、ホント」

「年頃の女性が何てこと言うんだよ、全く……」

椿は口先を尖らせて、しつこくぶうぶうと文句を言う。それを受け流しつつ、タイニイは2杯目のホットミルクを注いだ。

骸という男については、タイニイも色々知っている。ほんの1ヶ月前、この界隈に姿を現した男で、「骸」という通り名は誰ともなくいつの間にかそう呼んでいた。

タイニイのようにホモセクシャルを武器にして食っていると、色々な情報が耳に入る。

そして何気なくパパが話していたのが、「骸が囚人だった」ということ。罪状は知らないが、それは骸を遠目に見て納得した。とろんとした眼と妙に落ち着いた表情は、彼がダウンナー系のアシッドジャンキーであることを示していた。

何よりもその無気力な佇まいは、気味が悪いほどの違和感を与えていた。

「……「革命のエチュード」を流して」

拗ねている椿の言葉を聞き、タイニイはくすくすと笑いながら、オーディオセットに向かった。

シヨパンとリストを椿は好む。タイニイはどちらかというトバツハが好きで、その二人は趣味ではない。何と言うか、シヨパンもリストもバランスが悪いと思うのだ。

「機嫌直しなよ、姉さん」

「こっちは楽しみにしてたのにさ」

どうも以前に一度、骸に抱かれた経験があるらしいが、その辺を詳しく椿は語らなかつた。ただ顔を見ていると、どうもドラッグや

金の問題だけでもなさそうだ。その辺を突っ込んで訊くほど、タイニイは子供ではない。

シヨパンの「革命のエチュード」は、どうしてこうもアンバランスで狂氣的なのだろうか？

それを好む樁のバランス感覚がおかしい訳ではなく、それが気持ち悪いが快感なのかだろう。

耳障りなほどに左手の指が踊っているのが分かる激しい旋律が刻まれる。これがリストの「超絶技巧練習曲」まで突き抜ければ、もう天晴れとしか言いようもない。だがシヨパンはその激しい旋律を奏でる技巧の中で、美しさを求めていた。それが彼の狂気を表しているように思うのだ。

凡庸な人生の歩み手には、きつと届かない極地なのだろう。バッハの持つ綺麗で左右対称なバランスとは全く正反対のそれは、時に不快感すら与える。

「そういえば姉さん、ロッドが死んだって本当なの？」

「そうそう、そうらしいのよ。何だか分からないけれど、上役が殺気立ってたから」

ロッドは三ヶ月前に出所してきた、札付きの悪党だ。

ファグナーがスラムを纏める以前、この界限はファグナーとスレイブ、二つの勢力が争っていた。それをハロルド・ファグナーが纏め上げた訳だが、その際にスレイブの人間もある程度は吸収した。そしてスレイブが残した最大の負の遺産が、三ヶ月前に出所した五人の男だった。

「ロッドが殺されるなんて、余程だよな。あいつの凶暴さって折り紙つきだったじゃない」

タイニイはもう一杯、ホットミルクを用意しそれを持ち、樁の隣に座りそう言った。

ロッドが出所したと聞き、元スレイブの構成員が何人か姿を消したと聞く。それを考えれば噂されているロッドの凶暴さにも納得がいく。

「そうだよねえ、でもまあ、あたいらには関係なんじゃない？」
椿のような快樂主義の呑気者には、どうも釈放されたこの五人のことは理解する必要もないらしい。まあそこが椿らしいといえましょう。

隣に座ったタイニーにっこりと微笑み、椿は化粧ポーチから小さな袋を取り出し、その中身のカプセルを口に含んだ。ホットミルクでそれを押し込んで、「おやすみ、タイニー」と告げ頬にキスした後、自分の部屋に引っ込んだ。

その椿を、タイニーは物憂げに見詰めていた。

ダイニングには、「革命のエチュード」が極限のテンションで流れていた。

果実

蒼い身体は硬い。その硬さは感じたこともない快樂に強張っているのか、それとも熟していない蒼いが故の美しさなのか。

それを知ろうとする度に、加地は強い興奮を覚え激しく突き立てるのだ。

あの監獄から釈放されて、加地が毎日繰り返しているのが、この少女とのセックスだ。釈放された三日後に、ファグナーから睨まれている奴隷商人から安く買った、まだ十五歳の少女だった。

無論、戸籍などはない。

漆黒の髪は綺麗なストリートだが、瞳はヘイゼルだ。混血が進み過ぎてルーツが分からない、スラムに棲む人間そのものだ。

少女が処女だったことが、余計に加地を興奮させた。ただの無頼漢らしくないのは、少女が受け入れる体勢になるまでは、きちんと愛撫をしているという点だろう。毎日繰り返した調教と言う名のセックスは、確実に少女の身体に快樂を芽吹かせていた。

その証拠に少女は今、その激しいセックスに我を失っていた。突き上げればきつく締まり、抜けば絡み付く。

女は抱かれ初めて色を持つ。色とはつまり妖しさであり艶であり、女が牝を誇る最大の武器だ。どんな美しい女であれ、色を持たない女ほど惨めな生き物はない。

勘違いすべきではない。

女は色を持ち、牝を誇るべきなのだ。女が女であることを決して捨てることが出来ないのならば、それは武器にすべき特質なのだから。

そして、色を覚えた少女ほど強い牝はない。その妖しさも艶も、幼さすらも武器になる。

加地は少女を飼っているのか、それとも少女に囚われているのか。それは少女に溺れている加地を見れば、一目瞭然だった。

聡い女は疎ましいものだが、賢しげな女は抜けている部分がありまだ可愛いものだ。

絶頂に上り詰めていきながら加地は、ただ只管腰を振り続けた。

「リリイ、今日でお別れだ」

加地の言葉を聞き、リリイは呆然と「そうなんだ」と思った。

加地との間には結局、飼い主と奴隷という境界線が在った。それを取り除きたいなどと考えたことはない。ただ、加地が時折見せる憂う表情が、気になって仕方がなかった。

リリイという名も、加地から貰った。奴隷商人に飼われていた頃は、番号はあれども名前など無かった。初めて与えられた名前の意味を知り、リリイはそういう女になると努力はしてきた。だがたった三ヶ月間で、何が変わるだろうか。

「私は邪魔になりましたか？ ご主人様」

「そうではない。俺の馴染みが骸に殺された。あいつは俺を決して赦すまい」

「ご主人様も殺される……と仰られるのですか？」

視線の先の加地は、ただ優しげに微笑みながらリリイの黒髪を撫ぜた。

加地の疵だらけの肉体は、加地が生きてきた世界を示している。だがそれに触れることは赦されない。所詮は奴隷なのだから。

「お前が巻き込まれることを俺は望まんよ」

「でも、私はたかが奴隷です」

「そつだな」

それがリリイの出来る、加地に対してのせめてもの反抗だった。

どんな感情を抱いていようが、所詮奴隷。言葉には出来ない想いが互いにある。とても幼く穢く、そして純粹な想いが。

どす黒く重い感情に、リリイはただ小さく俯いて唇を噛んだ。

加地の住むビルに辿り着いた時、骸は妙な違和感を覚えた。

加地は酷く用心深く狡猾な男だ。ロッドが殺されてまだ日が浅いというのに、警護をする人間が誰一人としていない。畏かとも思ったが、骸は不思議な確信と共にビルに足を向けた。

案の定、表に警護は誰もいない。それどころか、オートロックなどのセキュリティシステムすら働いていない。

軽く周囲に視線を向ける。

一階に部屋はない。

何が目的で加地が己を危険に晒すのか、それが分からないだけに不気味ではある。だがそれを考えても意味はない。

骸の目的は、加地の殺害だけなのだから。

前もって調べていた最上階のフロアに辿り着き、骸はゆっくりと加地の部屋に向かい歩く。途中、確信と違和感に混乱した頭を落ち着かせる為、安煙草を啜えて火を点けた。ゆっくりと紫煙を吐き、少しだけ思考を整理する。

加地を狙う理由は一つ、目的も一つ。

物事は常に、シンプルに考えるべきだ。加地が何を考えているかなど、全く関係がない。今現在、どんな生き方をしていたとしても、何の問題にもならない。

目的は、唯一つなのだから。

安煙草を踏み潰し、骸はふらりといつもの様子で、加地の部屋に向かった。

部屋に入りまず感じたのは血の臭い。生臭いそれは、極端な緊張感を骸に与えた。

物がなく整理され清掃の行き届いた、まるでシヨールームのような、恐ろしく生活感のない部屋だった。

加地の極端な潔癖症が見て取れる。ある意味で神経質だとも感じられるそれは、骸に妙な圧迫感を与えた。

ガバメントを抜きリビングに入った瞬間、骸は眉を顰めた。

「……ふざけるなよ、加地」

両手両足を縛られソファに座る加地の首筋から、鮮血が溢れている。眼は生気を失い恍惚と濁り、口の端からも血が流れている。

そしてその傍に、加地のペニスを愛しそうに舐めている少女がいる。狂おしいほどそれを舐める少女には、妙な色香が漂う。

「お前が殺したのか？」

問う骸など全く眼に入らないほどに、少女は一心不乱に、ただ只管に舐め続ける。肩に触れると瞬間、少女は骸の腕に噛み付き、睨みつけた。少女を張り飛ばし、傍のローテーブルに散らばった粉末と紙切れを見、骸は憐れみを帯びた視線を少女に向けた。

「せめてもの手向けだ、加地」

そして小さく呟き、少女の後頭部に銃弾を撃ち込んだ。

月明かりの下、気晴らしに吸った安煙草は悲しいほど不味く、骸に不快感しか齎さなかった。くだらない愛憎劇に付き合っことほどの茶番はないと思いつつながら、骸は唾を吐き捨てた。

悪党

ロッド、加地、貞、ドナルド、陳の五人は、ボーイが纏め上げていた武闘派集団であるスレイブ・ファミリーの中でも、特に抜きん出て凶暴な連中だった。「奴らが動けば必ず死人が出る」と、スラムの人間達は侮蔑と畏怖を込めながら囁き合っていた。

その彼らが最も敵対していたのが、ファグナー・ファミリーのボスであるハロルド・ファグナーだった。

確かにこのスラムの利権を巡り、ファグナーとスレイブは争っていたが、武闘派集団であるスレイブの面子とて馬鹿だけではない。争いは血生臭い抗争だけではなく、顔を突き合わせての交渉という手段もあるのだ。

ハロルド・ファグナーは出来るだけ、戦闘を避けていた。理由は幾つかあるが、一つはこの時期にこの界限を狙っていた勢力はスレイブとファグナーではなかった。トキョーの最大勢力であるロイヤル・ファミリーも動いていたからだ。ロイヤルに数で圧倒的な不利であることは明白である以上、スレイブと馬鹿正直に抗争などをやっている余裕などなかったのだろう。

だがハロルド・ファグナーとBOYの思惑を台無しにしたのが、この五人だった。交渉の場に突然現れ、ファグナーの幹部二人を撃ち殺した。そしてファグナーの構成員ならば誰彼構わずに男は鬪り殺しに、そして女は犯し殺した。

「……骸、か」

陳は、まさかロッドはともかく加地が殺されるとは思っていなかった。

正確には加地の奴隷だった少女が殺したのだが、その少女がロッドと同じコルトガバメントで撃ち殺されている以上、骸が狙っていたことはまず間違いはないはずだ。

五人の中で特に凶暴だったのがロッドとドナルド、思慮深いのが

加地、五人のバランサーが貞、そしてリーダーが陳だ。

思慮深く用心深い加地が、安易に自宅にまで侵入されているのが信じられない。護衛役の手下どもに話を訊いたが、護衛を外させたのは加地自身ではなかったと言うのだ。

ハロルド「ファグナーと所轄の不良刑事ローランド」「イフタスの二人に嵌められた五人は、暴行、強姦、殺人、テロ行為など八つほど様々な重犯罪の容疑を掛けられ、逮捕された。

陳は別段、ハロルド「ファグナーを怨むつもりなどない。スレイブが負けたのはボスであるBOYが迂闊で間抜けな粗珍野郎だっただけだ。五人が嵌められたのも、己らが馬鹿だったからだ。

骸との因縁の始まりは、五人がファグナーの構成員を狩っていた頃に遡る。

その頃、ファグナーの売春宿に「翠」という名の女がいた。別段、特別美人という訳ではない。線も声も細く、愁いを帯びた儂げな微笑みが妙に男心を惹く女。

陳らは何も考えずにその売春宿を襲い、翠は念入りに可愛がった上で殺し首を切り落とし通りに晒したのだ。

その翠が唯一人だけ心を許していた相手が、骸だった。

その頃の骸は単なるドラッグの売人で、大した力などなく、敵討ちと五人を襲ったが返り討ちにした。

だが骸は何度も何度も五人を狙う。その度に返り討ちにしてやった。殺さなかったのは、骸が滑稽で惨めで笑えたからだだった。

そして決着の付かぬままに五人は逮捕され、五人に遺恨を持つていた骸もまた、ファグナーの邪魔者とされ冤罪を着せられ、10年間の懲役を喰らった。

「なぜだ、なぜ今更、私達を狙う？ そんなことをしても一銭にもなりやあしないのに……」

そのバーのカウンターでアーベドックをストレートで空けていた貞が、不機嫌にそう呟いた。

隣に座る陳は、指先でロックグラスの氷を転がす。ワイルドター

キーの癖のある味わいが、陳は好きだった。

指先を舐めてから、己を嘲るように告げた。

「女よりも執念深いな、骸は」

「あいつらの関係ならば狙って当然なのかもしれないな」

復讐を誓う者は、それを果たす為にならば大概のことをやってのける。時にそれが己のプライドや信念を曲げることになるうとも、厭わない。復讐者にとっての快樂とは、「相手を自分の立場まで貶める」というモノだからだ。

「陳、ドナルドはどうした？」

「あいつは相変わらずさ。スラムで狩りだ」

「あいつは分かっているのか？ 今の状況が……」

分かってなどいないことは、付き合いが長いのだから理解している。ドナルドに分別なんて高尚なものは元々ないし、それがあつたら苦労などない。

ただあいつならば、例え何があつても生き残りそうだという妙な確信がある。

ドナルドの凶暴さは桁違いだ。ドナルドならばまた、骸をあつさりと返り討ちにしてくれそうだ。

一息にグラスを空け、陳はグラスにワイルドターキーを注ぐ。

「まあいい。狙われているとは言えども、私達にはロッドのような油断も、加地のような不審もないのだからな」

それは希望的な推論に過ぎないと、陳も貞も気付いていた。もしも加地が万全な体勢をとっていたとしても、きっと骸には狩られていただろう。

それはロッドの死体を見れば分かった。助かった情婦どもの言葉になど事実はあるとも真実はない。大切なのはあのロッドが、抵抗もせずに狩られているということだ。釈放後のロッドが多少の分別を覚えていたとしても、ロッドの本質はあくまで凶暴さなのだ。

そのロッドが、一発の銃弾によって葬られた。つまり今の骸は、それだけ凶暴さでも凶悪さでもない決定的な力があるのだ。

色に例えるならば、様々な穢れた澱みを呑み込んだ漆黒。元來存在している純粹な黒色ではなく、様々な色が混ざり込み澱み続けた先にある、漆黒。

「十年もあれば、人間は変わる。私達が常識や道理を得たように、骸もまた何かを得たのだろうな」

「強さは概念に過ぎないのだから、当然か」

陳と貞は互いの持つグラスを交換すると、互いにそれを空けた。それはある意味での決別を示す。互いに次に会えるかどうか分からぬ者達が交わす礼儀。

「私は私のやり方で骸を追う」

「そうか、私は消えさせてもらうがな……」

陳の言葉に苦笑しながら言葉を返した後に、貞は席を立ち「じゃあな」と別れを告げ、バーを後にした。

五人にとつて、この世界で信用し得るモノは、血をも超えた絆だけだった。それは押し付けるものではなく求め得るものでもなく、ただ自然に生まれ強くなるものだ。死線を潜り抜けてきた者達だけが得ることが出来る、そんな絆だった。

だからこそ互いの出した結論には異を唱えない。それが間違いであれ何であれ、血を越えた絆を持つ大切な者が出した答えなのだから。

バーから立ち去る貞の背を見ながら、陳は彼の幸運を祈った。

懺悔

クラツシユが入り激しくペイントのされたジーンズ穿きに雪駄、デザインＴシャツを着てお日様の下を歩く姿からは、彼が骸だとは誰も思わないだろう。

ただ相変わらずその眼は強く澱んでいた。陽の光に対して少々鬱陶しげに睨みつけ、ただ通りをふらりふらりと歩く。

「あらら？ あれって骸じゃあないか」

昨夜、腹痛を理由に仕事を休んでいた椿はその時、珍しく昼間に起きて映画を観に向かっていた。本当ならばタイニイとでも行くところだが、タイニイは朝からパパと旅行に行ってしまった。

暇潰しといえはそうだが、何しろ一人で映画に行く寂しい身の上だ。興味があつた感は否めない。だが妙な違和感を抱いて、椿はとりあえず骸をつけてみることにした。

骸がまず向かったのは、イーストエリアのゲート近くだった。

空ろな骸の視線の先には、派手な格好をした女がいた。と言つてもどう見ても、三十路を随分と超えているようだ。

その女を見て、骸は苦笑した。

「なんだい、骸の奴。あたいのことは忘れてるのに、あんなケバいおばちゃんは覚えてるワケ？」

街角から隠れ見ながら、おばちゃんに近づく骸を睨む。

無性に腹が立つ。骸はどうも自分のことを忘れてしまっているようだ。椿はこの10年間、骸を一日たりとも忘れたことはない。

骸はその熟女に、分厚い封筒を手渡した。するとその熟女は骸の頬にキスをして、代わりに小さな袋を手渡す。

それは離れた場所から見ている椿にもはっきりと見えた。あれは間違いないドラッグだ。

熟女に別れを告げた後で、骸は袋を開けて錠剤を二粒を手に取り

それを口に放り込んだ。

その後の変化を椿はじつと見詰めていた。あのアシッドジャンキの鏡のような骸が飲むドラッグだ。ドラッグは快樂の為に嗜む椿にとつては、どんなドラッグなのか知りたいところだった。

だが飲んだ後の骸には、何の変化もない。

興奮も沈静もない。

ただいつもの虚ろな骸だ。

どうも意味が分からない。骸が飲んだのは、何のドラッグなのだろうか。

錠剤を飲んだ骸は、またふらりと歩き出した。

次に骸が辿り着いた場所はイーストゲートから出て10分ほど歩いた場所だった。どう考えても、骸には似合わない。それは街角にある、小さな花屋だった。

椿はぽかんとして、その花屋に入る骸を見ていた。

その花屋を恐る恐る覗き込むと、少しだけ照れ臭そうに骸は花屋の娘と話している。

会話を盗み聞きしていると、どうも骸は週に一度くらいのペースでこの店に通い、毎回花束を買っていくらしい。

「骸の奴、女がいたのね……」

あたいのことは完全に忘れていくせに、別に女がいてその女とこれから逢引とは、本当に舐めくさっている、と椿は思った。

だがそう思ったところでふと気付く。

「アホクサ、これじゃああたいが嫉妬しているみたいじゃない」

だが腹が立つのは嘘ではないのだから、どうせならば骸の女って奴を見てみyarou、と企んでみた。

大体、骸のようなヘタレには、絶対に口クナ女はいないと確信が持てる。それならば、骸の女って奴を見るのが、結構楽しみに思えてきた。

骸が店から出ようと動き出したので、椿は慌て出入口から離れた。

角まで逃げてそこからまた顔を覗かせる。

「……イーストゲートの外かあ。こんなところ、あたかも久しぶりだよ、全く」

トーキョーの周囲を囲う高さ数メートルを超すフェンス。東西南北に存在するゲートを出ると、そこはある種の無法地帯になる。

ゲートといっても実際は監視の警官が数人立っているだけで、出入りは自由だ。だがやはりそのフェンスとゲートという物質と法の圧力は大きく、これを境界にして世界ががらりと変わるのだ。

とはいえ、ゲートの外の全てが無法地帯ではない。この花屋近辺のように、平和な場所もある。

「……骸つてこの辺の出身だったっけ？」

考え込みながら、歩き出した骸を見詰めた。

あの頃の骸は単なる売人だったが、今のように眼が潤んでなどいなかった。大きな野望を秘め、ギラギラと強烈な焔を眼に宿していた。今のように、アシッドジャンキーではなかった。

角から見詰めながら、椿は複雑な想いに胸が苦しくなった。

そして花束を抱えて骸が訪れたのは、寂れた墓地だった。

ここに葬られた連中はなんと不幸なのだろうか、椿は眉を顰める。

バレないようにつけてきたが、骸はジャンキーだと思い出して小さく笑った。きっとあの男は、また自分を見ても「誰だ？」と問うのだらう。

隠れている意味を無くした椿は、隠れるのをやめてゆっくりと墓地に入った。こんな寂れた墓地に誰が葬られているのだろうか？

「……もしかして、あの女かな？」

まあそうだとしても、椿には関係がない。

あの頃のネンネだった自分ならばともかく、今はあの女よりも経験をつんでいるつもりだ。あの雰囲気には騙された男は多かったし、骸もその一人だったようだが、椿に言わせればあんな女は屁にもな

らない。

視線を泳がせて骸を探すと、骸は墓地の端にある墓標の前で傅き祈っていた。墓標の前には、この寂れた墓地では珍しいほど、幾つもの花束が飾られていた。

椿はゆっくりと近づき、骸にこう話し掛けた。

「あんたもその偽善女の信奉者かい？」

「いや、違う。俺は翠の素顔どころか、本当の名前すらも知らない」「ふうん」

墓地を無言が支配した。椿はただ、祈り続ける骸を見詰めていた。あの女を「偽善女」と罵ったのに、骸は怒る素振りすら見せない。

「……ただ、ケリをつけただけだ。あの頃の馬鹿な俺と、あいつらとの」「……そうかい」

骸がゆっくりと振り返り、椿を見た。骸の眼を見詰めた椿は小さく溜息をつき、「嘘つけ、馬鹿鹿」と小さく呟いて骸に背を向けて歩き出した。

ふと、映画に行こうと思う。

思いつ切り泣いても恥ずかしくない、そんな胡散臭いほどの感動巨編を。

「……そうか」

寝癖の付いた褪せたブロンドの短髪を掻くと、ボロボロとフケが落ちる。荒い無精髭を撫ぜ、その男は思案に耽る。

この四十男の名はローランド・イフタス。この界限を取り仕切る不良刑事だ。特にハロルド・ファグナーとの因縁は深く、これまでもこのスラムの事件を幾つも解決してきた。

法を守る為になれば他の全てを犠牲にすることを厭わない男。

> i33557 — 1143 <

「ええ、ロツドの死体には、銃痕の他に死因になるものはありませんでした。それに加地は飼っていた少女によって殺されたようですが、その少女を身体から検出した弾丸と、ロツドの死体の弾丸とが一致しています」

ローランドの机に座り手際よく説明をしていた金髪碧眼の女は、賢しげに映るその大きな瞳を今は訝しげな色に染めていた。

「どうした、ニッキー」

「いえ、ちょっと気になることがあって」

ローランドが「なんだ」と問うと、ニッキーはペンで頭を掻きながら苦笑してこう言った。

「……ハロルドは、もしかしてこうなることを分かっていたのでしょうか？」

「司法取引でブタ箱から助けるのが、どうしてあの五人である必要があったのかと考えれば、答えは簡単だ」

ニッキーは顔を顰めながら「汚い男ですね」と吐き捨てた。そしてそのすわりとした足を組み直し、胸元から煙草を抜くとローランドに差し出して啜えさせ火をつける。

ローランドは手元の資料をじつと見詰めながら、資料に添付されている写真をペン先で弄ぶ。

馬鹿馬鹿しい反面でハオルドの判断は正しい。ロイヤルとのパワーバランスを保つ為には、仕方がない部分も多い。

あの五人は、やり過ぎた。だが同時にスレイブで最も凶悪だった五人を最も有効に使う術を持っていたからこそ、五人の逮捕後もハオルドは生かし続けてきた。

だがここにきて事態は最悪のシナリオへと向かおうとしていた。事情の変化によって五人を消す必要があったのだろうが、ハオルドがここまで露骨に動くこと自体が、事態の緊急性を示していた。

「ただでは済まんぞ、このままでは」

「さすがはハオルド。ファグナー、といったところですかね」

細く紫煙を吐き眉間に皺を寄せると、じろりとニッキーを睨んだ。ニッキーは白い肌を蒼白に染めて硬直してしまふ。

ハオルドを貶すことを赦すことはあっても、ハオルドを褒めることをローランドは絶対に赦さない。

互いが必要悪だと認めていても、それは所詮必要悪に過ぎない。

片やマフィアのボス、片や所轄の不良刑事。

必要悪で在れども、互いが邪魔であることに違いはない。

煙草を指先で潰し、灰皿に放り込む。

「……覚えておけ、ニッキー。俺はあいつが誰よりも嫌いだ」

その眼に宿るその狂気は、ハオルドに対する圧倒的な澱みを孕み凶悪な色に染まる。ニッキーはただそれに怯え震えながら、小さく頷いた。手元からジッポが落ち床に撥ね、乾いた小さな金属音を立てた。

「……くそつたれ、あの野郎、どうするつもりだ？」

そのジッポを拾いニッキーに手渡し、また頭を掻く。フケが落ちて肩に積もる。それをニッキーは蒼い顔で叩き落とした。

「あ、あの、ボス」

「なんだ、ニッキー」

「もう一つ、情報があります」

ニッキーは気を取り直すように視線を逸らして、小さく呟く。

「その、骸が帰ってきたようなのです」

その言葉を聞いたローランドの片眉が跳ね上がる。

「生きていたのか、あいつは……」

十年前、逮捕した時に既に骸の身体はボロボロだった。当然だ、あの五人を何度も襲いその度に返り討ちにされていっただから。生きてはいたが、生きているのが不思議なほどの傷を幾つも負っていた。しかもハロルドの手配で送られた監獄は、第62監獄 重犯罪者と無期懲役囚、死刑囚のみの監獄 だ。あそこに収容されて生きて帰ってきた者など、片手で数えるほどのはずだ。

「……？ もしかしてハロルドにとっては、あの五人よりも骸の方が怖かったのか？」

唐突に思いつく。確かにあまりにも妙だ。五人はそれぞれ別の監獄に送られたが、少なくとも骸が送られた第62監獄のように酷い監獄ではなかった。少なくとも、最低限度「生きる」権利は残されていた監獄だ。

だが骸が送られたそこは「劣悪な労働環境での獄中実験死」が隠された前提であり、そこには権利など存在しない。

「……そこから生きて帰ってきた男か」

逮捕した頃の骸には、何の能力も魅力も感じられなかった。

「なら、ロッドを殺した犯人は確定ですよね」

論じるだけ馬鹿らしい。骸が戻ってきているのなら、奴は必ず五人を狙うはずだ。

だが露骨なこの図式には、必ず裏があるだろう。今回ばかりはロランドも、ハロルドを助ける気にはならない。確かにロイヤルとの兼ね合いは大事だが、ファミリーの為にあまりにも血を流し過ぎた。

ロッドや加地などはどうなるかが構わない。

第一、連中の死は自業自得というものだ。逮捕する容疑さえあれ

ば、ローランドは五人を第62監獄にぶち込んだだろう。

「この街の法は破らせんぞ、ハロルドよ……」

虚空を睨み、ローランドは安煙草を噛み潰す。

馴れ合いに興味はない。本気で殺し合うほどに親しくもない。利権などくだらない。ローランドはただ、この汚く穢い街を守りたいだけだ。

ただ生きる為に必死な、このスラムに住む者達の権利を守りたいだけだ。

その為にならば喜んでこの手を汚そう。

「ニツキー、チャーとロンにハロルドを張らせる」

「了解」

ローランドの言葉に頷いたニツキーが机から降りようとした瞬間、ローランドの手が彼女の内太腿を掴む。突然のことにニツキーが目を見開き、ローランドを見た。

「夜に部屋に來い、可愛がってやる」

「……はい」

ニツキーの目はその言葉に妖しく潤み揺れた。頬を染め逃げるように立ち去るニツキーを見て、ローランドは「まだネンネだな」と呟き苦笑した。

まずは骸を確保することだろう。骸を確保すれば間違いなく、ハロルドの動きを封じることができる。

だがタイミングを間違えば、骸ごとローランドを消すだろう。

「……五人を殺す役目は骸、では骸を消す役割は誰だ？」

虚空に問うが答えはない。

胸ポケットを漁り煙草を探すがなく、仕方がなくローランドは灰皿のシケモクを啜えて火を点けた。肺の奥にまで吸い込み、顔を顰めて床に唾を吐く。

やはり、シケモクは不味い。

「豚は豚箱に放り込むしかないか……」
それは当然の真理だ。

暴君*

「……どうなの？」

その赤毛の女は、周囲に惜し気もなく強烈な色気を放つ。見事としか表現しえないそのスタイルは彼女が女たる誇りであり、何よりも矜持だった。

この界限で生きていく為に綺麗事を抜かす連中は皆、その言葉を言い切るよりも早くあの世に逝った。

「上の連中は気が短い。それにあいつらは簡単に狩られるタマじゃねえ」

赤毛の女の視線の先でウオツカを煽る男は、不機嫌そうに荒く鼻息を吐いた。

彼を知る者はほぼ全員が、彼をこう評する。

暴君、と

> i 3 3 5 5 9 — 1 1 4 3 <

彼はそんな評価を否定はしない。その評価に薄ら笑いすら浮かべる。

「上は単純に、ゲームを楽しみたいのさ」

「でも、ロイヤルと遣り合うなんて、そんなの……」

「無茶は承知だ。今回ばかりはローランドも力を貸すまい」

忌々しげにそう呟くと、彼はウオツカを瓶ごと煽る。赤毛の女は小さく溜息を吐きながら、男のウオツカの瓶を取り上げる。その男の刺すような視線を抗えるのは、ローランドとこの女、二人だけだ。「らしくないよ、ハロルド」

「五月蠅え、吞まずにやっつてられっか……」

酒臭い息を吐くハロルドの唇を、まるで奪うように女は唇を重ねた。

この暴君に触れて赦されるのはこの女だけ。リオンと呼ばれる素性の知れない女だけ。唇を絡ませながら舌を吸うと、彼の吸うピースの匂いがした。

「欲求不満か？」

「……あんたはどうしてそうムードがないの？」

「悪いな、俺は全て奪う主義なんだ」

そのままベッドに押し倒され頬を膨らませながらも、リオンはハロルドにされるがまま抱かれた。

地中に埋められた女の生首を踏みつけながら、その男はにやにやと晒っている。

この世界はなんと都合のいい世界だろうか。男のような人間には、スラムは楽しい狩りの場だ。

「……おお、いい色の薔薇が咲いたな」

男は一層楽しげに晒い、手に持つワイングラスを傾けた。二十年前の欧州大戦の真っ只中、このワインを作っていた一軒のワイン農家は、銃弾の飛び交う最中でそれでもワインを造り続けた。

だが彼らの住む村は戦火に晒され、彼らも末の娘を残して殺されてしまった。

そしてその年に作られたワインは、直前に瓶詰めされた五本のみで、そしてそれが史上最高の出来だと称された。

そして五本の内、実に三本を男が所有している。

そして今日はすこぶる機嫌がいいらしく、一本の封を開けて愉しんでいたのだ。

女の生首の周囲には、真っ赤な薔薇が咲き誇っている。まるで女の美貌と若さと生命力を吸い尽くしてしまったかのように。

「……ドナルド、またやったの？」

その性癖はあまりにも惨たらしく、あまりにも残酷だ。女を愛するということ、つまりは髑髏殺しにすることだと男は笑いながら言うのだ。

「ナンシー、見てみるよ。この深紅の色合い。この女の血は甘かったらしい」

ドナルド・ウラニウムは、トーキョーのアップerground有数ともいえる財閥の総帥の私生児だった。だが彼はその立場を捨てスラムに墮ち、スレイブ・ファミリーの一員として暴れ捲くり、そして一人の男と出会う。

それがファグナー・ファミリーのボス、ハロルド・ファグナーだった。

一目で分かった。この男は上り詰めていく男だと。

そして確信した。この男は王だと。

ただ例えそうだとしても、互いの立場は敵同士だった。

ハロルドは対等と認められた者しか信じない。それは彼のポリシーですらあった。だからこそドナルドはハロルドの駒として生きる道を選んだ。会話なんぞしたことがなかった。だがドナルドはハロルドが望む行動を読み、とり続けた。

ハロルドが疎んでいたファグナーの重鎮二人を消し、スレイブとの講和を台無しにした。ハロルドが武力闘争を嫌っていたのは確かだが、その重鎮二人はハロルドの意にそぐわない行動をあまりにも取りすぎたのだ。

また公然とハロルドを非難する娼婦の一人を犯し殺した。

「……ふうん、どんな違いがあるのかしら、この女と他の女に」

ナンシーという女は、そんなドナルドが唯一人だけ殺さない女だった。ドナルドはナンシーを女として見ていない。いや、ドナルドの概念には雄雌なんて低劣なモノはないのだ。

「知りたいか？」

「ええ、知りたいわね」

「この女はあの時の女と同じ、俗に言う善人って奴だ」

「あはっ、善人の血は甘いんだ、つまり」

ナンシーはさも可笑しそうに吹き出し、そのまま転がっている女の頭を蹴り飛ばした。女の首は壁に向かって飛び、激突した瞬間に

左目が飛び出し転がった。

「やつと分かってきたよ。ドラッグなんかで濁った血ではいい色にならない。健康で善人、更に女ならばいい色になる」

ドナルドの趣味は薔薇の栽培だ。何よりも深く美しい深紅を目指している。スラムで獲物を狩るのも全てはその為だ。

ナンシーはいつの間にかドナルドと一緒にいた。出逢いなんぞ覚えてもいない。牢獄にいた十年間、ドナルドを待ち続けていた。釈放の日、監獄の前で待っていた。その姿を見れば、どれだけドナルドを愛しているのかがよく分かった。

「ふうん、じゃあ次は善人の美人探さなくちゃね」

「……いや、それに処女で試そうぜ」

「きやつ、破瓜の血をいただいちゃうの？ それいいかも」

ナンシーはさも楽しそうに笑い、鼻から粉を勢い良く吸い込んだ。

思う存分に抱くと、リオンは疲れ切って眠ってしまった。そのリオンをベッドに寝かせ、ハロルドはピースに火を点け紫煙を吐く。この界限でこれから始まる争いには多く犠牲を伴うだろう。ロッド、加地は予定通り消えた。だが陳も貞はそう簡単にはいくまい。ドナルドは手駒として残しておく価値はある。

「支配者は一人だ」

ハロルドの部屋から見える景色は、どこまでも高くどこまでも汚かった。

取引

キーボードを叩く指は休むことなく、三つのモニターを世話しく見回す眼には想像を絶する情報が飛び込んでくる。

女はそれをじっと見詰めながら、小さく溜息をついた。不意に指先の動きが止まり、女は口に煙草を咥え火を点す。深く息を吸い紫煙を吐き、メールサーバーにアクセスを始める。

数秒後、フォルダに十数通のメールが届き、その中の一通を開き内容を確認した。

「……動き出したわね、ロイヤル」

そのメールの内容は、ロイヤル・ファミリーの行動を細かく記したものだ。情報屋としての一面を持つ女には朝飯前のことだ。

この世界はネットワークでつながっている。その有用性は無限大だ。右のモニターの側に置いてあるコーラが注がれたコップの氷が崩れて、カランと乾いた音が響いた。

どちらにしても、今の状況はあまりにも危うい。アッパーグラウンドの連中がロイヤルを使い起こそうとしているゲームとは、言うてしまえばロイヤルとファグナーの抗争なのだ。

ハロルド・ファグナーは易々と殺されるタマではない。このトキョー最大の組織であるロイヤルが相手だとしても、スラム出身の面者が多く実戦経験が豊富なファグナーは感嘆には屈しないだろう。ただだからといって無意味とも思える抗争に、大切な部下を曝せる訳がない。

ハロルドの野望は、そんな小さいものではない。

「……ただ、今回のこれは避けようもない、か……」

女は頬を掻くと冷えたコーラを一気に飲み干し、煙草を灰皿に押し付け、深く椅子に沈みこんだ。ぎしり、と椅子が悲鳴を上げる。

ローランドの一派に加わりもう二年が過ぎた。法の番人と呼ばれるローランドは、このスラムの秩序を守る為には手段を選ばない。

一人の死が結果百人を救うのならば、その一人を殺すことを厭わない。

無論、彼にも苦悩はある。

それを表に出して誰かに甘えることはないものの、結果最も彼と接しているニッキーは、それを良く知っていた。

このスラムの住民を守ろうとするならば、己の心は捨てなければならぬ。彼が時折見せるあまりにも哀しい眼は、己の心を殺している証だ。

ハロルドとの関係はあくまで対等だ。

組織の大きさとしては敵わないが、人材の優秀さならば決してひけはとらない。

ハロルドと敵対し抗争でも起こし弱体化すれば、結果このイーストエリア外の勢力が侵攻してくる。

そうなつては意味がない。

そしてハロルドの存在は、スラムに潜む悪党どもに最低限度の秩序を齎す。だからこそ、ハロルドとローランドは互いを必要悪だと理解し、敵対はしていないのだ。

小さく溜息を吐く。

その微妙な関係に、ひびが入ってしまった。その原因が、出所してきた骸だ。

骸の出所を、ハロルドはきつと予想していなかったのだろう。何しろ骸が放り込まれたのはあの第62監獄だ。しかも放り込まれたその時、骸の身体はボロボロだった。左足の膝の腱は八割が切れ、歩くことすら困難だった。左手は粉々といつていいほど粉碎骨折しており、もう強く握り込むことすらできない。それ以外でも全身には切り刻まれた痕が無数に走り、健康体に戻ることは在り得なかった。

その状態である監獄に入り、しかも十年という時間を生き抜いてきた。

生き抜いた彼の生命力が強かったなどというふざけた理由はない。

そうではなく、それだけ彼は狡猾になったのだらう。

極限の状況を十年間生き抜いた。彼が強いのは当然だ。今の骸という男は、第62監獄に放り込まれる前の何倍も強いだらう。いや、きつと強さという価値観の中に、彼は存在していない。

唐突に携帯が鳴った、ディスプレイを確認すると、そこには「ロン」と表示されている。

「ロン、何の用事？」

『おうニツキー、ボスそっちにいるか？』

電話に出ると受話器の向こう側からは、騒々しい雑音が聞こえた。「いないわよ、アパートじゃない？ 何か伝言？ どうせもつすぐそっちには行くけど……」

『……あゝそつか。いや、今度でいいや』

「あつそ、じゃあ切るわよ」

ニツキーは素っ気なく言葉を返して、通話を切ろうとするが、口には『ちよいまち』と慌てた様子でそれを止めた。

『ちよつと頼みたいことがあるんだ。 دونالد・ウラニウムの経歴を徹底的に洗ってくれないか？』

ロンの声色は恐ろしく真剣だった。それだけでこの依頼が徒事ではないことは分かる。

「……個人的に？ それとも私達コブラに關係して？」

『個人的に、だ』

ローランドが率いる超法規粛清組織コブラにおいて、個人の目的の為に組織の力を使うことは厳禁だ。決してしてはならないとローランド自身がきつく戒めていた。

それはどこまで穢れようが、己が警察官であるという矜持だった。ロンは相棒のチャーと共にローランドファミリーの古株だ。所轄の SWAT に所属し、このスラムの悪党どもに恐れられている。

「……私らの不文律、知っているわよね？」

『ああ、その上で個人的に頼みたい』

「私、ボスに睨まれるのは勘弁してほしいんだけど……」

『ただとは言わねえよ、”D”を五本でどうだ？』

「あんた正気？ そんなモノどこから……」

『言わせんなって、そういうルートなんだから……』

ニツキーは盛大な溜息を吐き、頬を搔いた。アッパーから墮ちた悪党のこととはいえ、確かに破格の報酬だ。

「……分った、引き受けるわ。でも私を巻き込まないでよね」

『ああ、恩に着る』

通話を切った後、時間を確認すると二十一時を過ぎようとしていた。

少しだけ思案し、ニツキーは椅子から立ち上がるとその場でスーツを脱ぎ始めた。

ローランドのアパートで、どちらにしてもシャワーは浴びるのだが、ニツキーは必ず自宅でもシャワーを浴びる。

これはある意味での儀式だ。ローランド「イフタス」という男は、決して誰かに心を委ねない。それは彼が強いからではなく、誰かに何かをさらすことができない、臆病者だからだ。だがだからこそローランドは、このイーストエリアの法の番人たれた。暴力でも権力でもなく、そのどちらにも頼らず嗅覚という臆病さに己を預けていた。

ローランドに抱かれるようになり、ローランドのそんな不安定さに惹かれた。常に他者を見下す不遜な態度をとるローランドが、実は臆病者だったという秘密に。

下着まで全てを脱ぎ捨て、また少しだけ大きくなったバストを見て溜息を吐く。

「……馬鹿」

恋人の耳元で囁くように呟き、ニツキーはバスルームに消えた。

彼はそんな古びたナイフのような男なのだ知っているのだから。

暗殺

不意に目を覚ます。ハロルドの隣にはリオンが安らかな寝息を立てていた。

視線を周囲に向けた。

熟睡しなくなったのはいつの頃からだったか。確かある程度ファミリーが大きくなってからだったと思う。その頃、まだ大した大きさではなかったが、幾つかの組織から疎まれていた。そしてそういう連中は手段を選ばないと、その時に初めて知った。

熟睡していたハロルドの腹に、ナイフを突き立てたのは、その時の恋人だった。

ハロルドは知った。力を持ち肥大化していくということは、周囲から疎まれ妬まれ、そして狙われるのだと。一命を取り留めて以来、ハロルドは熟睡したことがない。

周囲に視線を向ける。

ここはファミリーが所有する高層ビルの最上階にあるハロルドのスイートだ。ここにだたどりつける人間がいるとは思えない。警備の人間だけで数十人、それが武装している。

だが確かなことは、ベッドルームに血臭が漂っているということ。暗殺者としてはマヌケな類だ。一流の暗殺者はこんな臭いなど残さない。だが相手が殺戮者だとしたら、話は別だ。もしそうだとしたら、ハロルドとしても厄介なことになる。マフィアのボスに必要なのは頭の回転の速さであり、リアルな暴力ではない。

「……おら、出て来いよ」

「……気付きましたか？」

「当たり前だ、どれだけ殺してきたんだ、テメエ」

扉からふらりと姿を現したのは全身が黒装束の男。眼すら漆黒に染まっていた。

「さすがハロルド」ファグナー。その嗅覚、お見事です」

「誉められても嬉しくねえな」

「でしような、これから殺されるのに」

ハロルドはゆっくりとした動作でベッドサイドのテーブルに置いてあるピースの箱を手に取り、一本抜くと火を点す。深く吸い紫煙を吐くと、ぼりぼりと頭を搔いた。

「お前、帰らねえか？ 相手するのが面倒だ」

「そう言われても困ります。私の仕事はあなたの暗殺ですので」

「失敗する仕事なんぞ受けるもんじゃねえぜ」

ハロルドが断言すると、暗殺者の眼が鋭角に尖る。そして腰に刺した短刀をすつと抜いた。短刀は塚も刃も漆黒に染められ、それが少なくとも彼がプロであることを示していた。

「……戯言を」

「それでもねえなあ」

暗殺者は背後から唐突に聞こえた声に身体を強張らせた。振り返ろうとしたがその頭を誰かが掴み、そして次の瞬間にはその首がぐるりと後ろを向いてしまった。

「遅えぞ、ドナルド」

「すいません、ボス。下でナンシーと楽しんでたもんで」

暗殺者の眼に飛び込んできたのは、線の細い優男のやわらかい笑顔。その笑顔の中にある強い意思を潜めた眼。その眼には強い狂気を含んでいた。

「残念だったな、お前」

ぎり、と頭の中に妙な音が響く。頭を掴み自分の身体を持ち上げているのだと気付く。

「俺がいる限りこの人は死なない。俺がただ一人、忠誠を誓った相手だからな」

意識が遠くなっていく。暗殺者は悟っていた。血の臭いに紛れたのは自分だけではなく、この男もだったのだと。

力は幾つもの解釈が出来る。筋力、権力、知力、精力、勢力、暴力、そしてドナルド「ウラニウムは筋力が図抜けていた。その筋力

は成人男性の数倍。しかもそれは何か別の助力によるモノではない。全てが神の悪戯によって齎されたモノ。

「……ボスウ、こいつどうします?」

「薔薇に使いよ」

「こんな奴の血イ使ったって、いい花は咲きませんよ」

「馬あ鹿、こいつは純粋な暗殺者だ。いい花が咲くと思っぜ。童貞じゃねえだろうがな」

ドナルドはきよとんとした後でにたりと笑った。そして扉を開けると廊下に死体を放り投げた。

「じゃ、後で試してみますよ。しかし姐さんって一旦寝たら絶対に起きないですねえ」

「ああ、こいつはセックスの後に寝たら何があっても起きない。最低八時間は寝る」

ドナルドはゆっくりとベッドサイドに歩き、リオンの顔を覗き込んだ。女なのにリオンには獅子のような威厳があるように思えた。獅子はサバナで寝る時、自分よりも強い敵がない為に、全く警戒をしない。大の字になって堂々と寝る。

「姐さんは強いなあ」

「俺に言わせりゃ逆だ。こいつは弱いから堂々と眠る」

ドナルドには意味が分からない。弱いから堂々と寝るとはどういう意味だろうか?

ハオルドは短くなったピースを吸い切ると、それを床に放り投げた。

「弱いから殺される時は殺されると開き直るっっているだけだ」

「……はあ、変な女ですねえ」

「ナンシーとつるんでるお前に言われたくねえ」

ナンシーの危険性を知るだけに、ハオルドは苦笑いを隠せない。ドナルドとつるめるのもナンシーだからという部分があまりに大きい。

「で、どうするんですか? ボス……」

「あん？ 何がだ」

「ロイヤルですよ、ロイヤル。あいつらの相手してたらキリがないですよ」

「……まあ、な。だが上からの指示じゃあ断れないだろ？」

「アップーグラウンドの人間にとってこのスラムは遊技場のようなモノだ。」

「……あいつらは人を人と思っていませんよ」

「まあ、俺とお前もそうだけどな」

視線を向けると、ハロルドはさも可笑しそうに笑っていた。だが言われてみれば確かにそうだ。ドナルドもハロルドも、色々な理由を付けて人を殺してきたのだから。

「で、お前はどうかんだ？ 最高の薔薇はできそうなのか？」

「ええ、まあ。何とかなりそうな感じですよ。処女の血が必要になりましたが……」

最高の薔薇は夢だとドナルドは言った。欧州大戦の只中で作られた、たった五本のワイン。それは至上最高のワインと称された。

それを飲んだ時、ドナルドは悟った。このたった五本、たった五本のワインに、結果何十万という命が注がれた。ならばもし、たった何よりも深い真紅の薔薇一輪の為に、何十万の命が注がれたとしたら、いったいどれほど美しい薔薇が咲くのだろうか。

「……罪深きは人の持つ夢か」

「だからこそ、追う価値があるんですよ」

何故、という理由は必要ない。嘘偽りなく生きることとは、つまり罪を重ねていくということ。

「……ドナルド、骸を狩れ」

「了解」

その時、ドナルドは見た。ハロルドの苦悩に満ちた顔を。

回想

ぎしぎしと文句を言う椅子に深く腰を下ろし、骸は左足をじつと見詰めていた。もう走ることにすら出来ない、不自由な脚。同じように右手は酷く砕かれてしまった為に、軽い握力しか残っていない。

それでも骸は、あの地獄の第62監獄から生還した。

酷いなんて甘い言葉では表現できない。一日一食の粗末な食事、一日十八時間を超える過酷な労働、風呂なんぞ週に一度あるかないか、寝床に敷いてあるのは一枚の毛布だけ。労働といっても通常では考えられない環境だった。不法廃棄放射性物質を防護服なしで処理させたかと思えば、大量の人糞の中でそれを只管ビンに詰める作業、気温五十度を越えるような熱射の下で延々と穴を掘らされたりもした。

その作業にどんな意味があったのか、今でも骸には分からない。生き残れたのは単なる幸運に過ぎない。自分よりも後に収容された受刑者のほとんどは、数日から数ヶ月で消えた。

だが、骸は生き残った。生き残る為には手段は選ばなかった。同室に収容される連中のほとんどは、骸に食事を奪われていた。たまに収容される”女”は犯してストレスを晴らした。

あそこは力が全ての世界だった。

看守はいない。各牢獄には自由で出入りが出来た。監獄により決められた規則などはなく、死んだら所定の場所に投棄すればいい。殺しが起きても関係がない。何しろそこから出る人間なんぞほとんどいないからだ。

だが、出る人間がない訳ではない。皆無に近い可能性を生き延びる者もいる。骸が知る限り、今まで鴉、蠍、キル、そして骸の4人しか生き延びていない。

左手に力を込める。今でも握力は成人女性よりも遥かに弱い。これでも毎日、相当の力を使い返してきた。始めた頃は物を握

るなんて絶対に無理だと思った。だがそれでもリハビリを続けた。その内、ゆつくりとだが指を動かせるようになり、やっとここまで動くようになった。

左足は膝が酷く砕かれていた。腱は八割が切れていて、手術でつなげてても機能の回復には限界があった。そしてそれから骸は、走らずに目標を追い詰め狩る手段を考えるようになった。

サイドテーブルに右手を伸ばし、ジーマのピンを握る。口元に運ぶと、微かにライムの香りがした。

残っていた半分ほどを一気に飲み干し、サイドテーブルにピンを叩き付けた。骸の眼には強烈な狂気が灯っていた。それは単純な憎悪とは言えず、だが快樂とも言えぬ複雑な色だった。

『……あなたって、本当に、馬鹿ですね』
不意に翠が告げた言葉を思い出した。

あの日、彼女が壊されたその時、腕の中で冷たくなっていきながら、翠は骸の頬にその小さな手を触れながら、満足そうにそう呟いた。どうしてそんなに穏やかでいられるのか、どうして「奴らを殺して」と告げてくれなかったのか、今でも分からずにいる。ただ、彼女が見せたその表情が分からないからといって、奴らを赦す理由にはならない。そしてきつと、あの笑顔の裏で翠は、奴らの死を望んでいたはずだ。

翠は深く息を吐き、『……ありがとう』呟き、息を引き取った。
「……翠」

小さく呟いて、骸は懐からドラッグケースを取り出し、中の錠剤を数錠飲み干した。そして椅子にもう一度深く座り込む。深く息を吐くと、心を落ち着かせようと再び深呼吸を繰り返す。

さすが「D」の効き目は早い。飲み干して数十秒でどっかりと心が沈んでいく。そうだ、興奮してはならない。常に落ち着かなくてはならない。この手のドラッグに手を出し始めたのは出所してすぐだった。

第62監獄に収監されていた頃に飲んでいた処方薬では、正直弱

かった。更に強いものを、強いものと探している内に、気が付くと最悪のドラッグである「D」にまで手を出していた。

意思で克服できるモノではない。最早己の寿命は数ヶ月と残っていないだろう。「D」に手を出した人間の末路は悲惨だ。

自分にとっても、そして周囲にとっても。

「……翠」

また小さく呟いた。毎回使う「D」の量があまりにも多すぎた為か、最早落ち着く以外の効果は無いに等しい。だがそれでも、それが切れてくると手足が震え、そして言い様のない焦燥感に駆られ、喉が燃えるような渴きに苛まれ、最後には意識が吹き飛びそうなほど興奮してくる。

今の骸には、その興奮が一番怖い。

翠との間にセクシャルなものはない。妹のように思っていた頃もあった。馬鹿みたいに純粹で、馬鹿みたいに素直で、客の男のいい加減な与太話に泣き、財布を渡したりもした。

大して美人でもない。それなのに彼女は、その売春宿で一番の稼ぎ頭だった。

骸から見ると、あまりにも無防備だった。だから、なんとなく放っておけなくなった。

「……馬鹿野郎」

力の入らない左手を握り締める。彼女が殺された後、骸はあの五人に復讐を誓った。銃を手に何度襲っただろうか。だが、土台生き抜いてきた世界が違いすぎた。どんなに策を練ろうが、どんなに周到に罠を張ろうが、連中には通用しなかった。

何度目かの襲撃の際、左手を砕かれた。テーブルの上に左手を押しさえつけられ、それを大き目のハンマーで何度も何度も潰され、痛みを意識を失いそうになると、腕にピックを突き刺され無理矢理意識を保たせられた。

解放された時、左手は原形を留めていなかった。

何度襲っても返り討ちにされ、身体を自由を一つずつ失っていつ

た。

その後、ローランドにより逮捕された。ハロルドは骸を第62監獄に送り、そして全てを闇に葬り去った。ファグナーはスレイブを吸収し、このイーストエリアを掌握。ローランドもまた、この界限での影響力を強めた。

それを監獄で知ったとき、骸は一つの結論に辿り着く。それはハロルドとローランドが手を組み、スレイブを潰したということ。ローランドにしてみれば、ファグナーとスレイブの抗争が泥沼化するよりも、どちらかの勢力に纏まり沈静化すること優先するのは至極当然だ。

そして、ハロルドの強烈なカリスマにより統治されているファグナーと、「ボスを決めるのは強さだ」と公言していたスレイブとなら、どちらに肩入れするのも決まっていた。

「ローランド…イフタス……」

呟いたその名に、骸は眉間に皺を寄せ、歪に口を歪めた。

逮捕された直後、ローランドは骸に「命拾いしたな」と言った。

五人への怒りに我を忘れ暴れる骸の鳩尾を蹴りつけ、「復讐しなければ生きることだな」と告げた。

奴がこの界限の正義であることだけは確かだ。その正義は常に一貫していて、法を守る為になれば、一般人でも平気で殺すだろう。

そして奴は自分の正義を疑っていない。

その傲慢さに何故気付かないのだろうか？ このスラムに生きている人間は、常に怯えている。ハロルドの暴力、ローランドの正義、そのどちらとも所詮は下らぬ下衆の都合だというのに。

だが、骸は自分が正しいとは思っていない。ただ、自分の流儀は守らせてもらう。第62監獄で築き上げた、自分なりの流儀。それは今、骸が生きている理由だ。あの地獄を生き抜いてきた理由だ。

何があるうとも、例えばどんな障害が待ち構えていようとも、あの五人だけは絶対に殺す。下らない、愚かな流儀だ。そんなことは自分でも分かっている。だが、それでも骸はその流儀を捨てるつもり

はない。

目の裏に焼きついている翠の死顔。彼女はきつとそれを望んでいないだろうが、そんなことは関係がない。愛した女を殺されて黙り込むほど落魄れてはいないつもりだ。

不意に強い眠気に襲われ、骸はそのまま意識を失った。

追跡

その男は成年というにはまだ早いが、少年と呼ぶのも妙な感覚を抱く、微妙な年齢だ。幼さの中に感じさせる真つ直ぐな凶暴さは、彼の拳には力が宿ると告げていた。

「……どこだ」

捜す対象の顔は知っている。だが行動範囲が全く絞れていない。一度はやりあったが、何しろその勝負はそいつの圧勝だった。とはいえ、そいつが窮地に追い遣られていると知ったからこそ、そいつを捜している。無論、その時の屈辱を忘れた訳ではない。だが、結果そいつの名誉に傷をつけてしまったのは事実だし、何よりもあの孤高の強者が多数によって狩られるのが赦せなかった。

こうなると地区として閉鎖されているイーストエリアも、随分と広い。歓楽街が多い所為か、人も結構多い。それが更に搜索を困難にする。

ファグナーの構成員でも走り回っていれば話は別だが、どうもそいつを追っているのは、腕のある者達のような。

そいつの強さに疑問の余地はない。だがだからこそ、そいつを追うのは腕の立つ者達であることに疑問の余地はない。

「……蠍螂よ、どこだ」

その男は renoma のサングラスをずらし、周囲に視線を飛ばした。腕の立つ者達に追われる事になった蠍螂は、スラムの影から影に隠れながら逃げているらしい。

肩まである濃いブラウンの髪をワックスで流し、目元は renoma のサングラスで隠す。黒いシャツは胸元を大きく開いて晒し、両手には黒い革のグローブ。タイトなブラックジーンズ、黒のコンバース・オールスター。

困っている女が情報通で、その筋から幾つかの情報は得ている。それによれば蠍螂は、ハロルド＝ファグナーの命を狙っているらし

い。無論安易ではないだろうが、手段がない訳ではない。何かしらの方法でそれを実行したのだが、どうやら失敗したらしい。蠍螂とて馬鹿ではない。自ら赴くほどサルではあるまい。ならば誰かを使つたと考えるのが筋だ。それが失敗したのだろう。

焦りが募る。

あの隻眼隻腕の男は今、どうしているのだろうか。蠍螂に対するリベンジはまだ果たせていない。それなのに蠍螂は殺され掛けている。

「冗談ではない。言ってしまうえば、蠍螂を殺すのは自分なのだ。そんなどこのサルともつかぬ者達に、勝手に殺されてはもらっては困る。」

歓楽街から裏路地に入る。ここからイーストゲート方面に向かうと、かなりの近道だ。だが反面でここいらは相当犯罪発生率が高い道に入った直後、男の携帯が鳴る。携帯に出ると、受話器の向こう側から少し鼻にかかった女の声が聞こえた。

「あ、焰？　蠍螂の足取りを掴んだわよう」

「……バーバラ、お前またやってんのか？」

「いいじゃない〜ちゃんと仕事してんでしょおう〜」

バーバラは、どうやら粗悪品をキメているらしい。金は持っているのだから、どうせなら「D」でもキメればいいのにと思う。

「で、足取りは？」

「えーとお、今はイーストゲート近くの「69」ってバーにいるみたいよう」

「そんな目立つところなのかよ」

『店のウェイターの話だと、誰かを待っているっぽいねえ』

焰はボリボリと頭を掻く。あの孤高を地でいく男が、誰かを待っている。だがもしも誰かを待つのだとしたら、何の目的で誰を待つだろう。蠍螂は誰とも組まない。誰も頼らない。そしてそれが蠍螂の強さにつながっていた。だからこそ焰は彼を狙うのだ。

『あ、それともう一つ、こっちの方が重要かもね〜』

「……何だ」

『ドナルドが動き出したみたいよう。どうやら本格的に例の骸つて男を狩るみたいねえ』

「そうか……よし、そのままドナルドの動きをトレースしてくれ」
『了解』

粗悪品をまあキメてるからどこまで役に立つかは怪しいだろうが、使えるものは使っしかない。焔は携帯をジーンズのバックポケットに押し込み、裏路地を駆け出した。どうやら急いだ方がよさそうだ。角を曲がり更に暗がりを駆ける。

考えてみれば、初めて対峙したその時、既に蠍は追い詰められていた。長年対立してきたハロルドⅡファグナーは凄まじい勢いで勢力を伸ばしていく。ハロルドの強権的な支配は、確かにある意味での秩序を齎すが、所詮それはハロルドの都合により歪められた秩序だ。そしてハロルドの都合によって消されたスラムの住民もまた多い。蠍から片目と片腕を奪ったのも、ハロルドだ。奪われたそれらよりも、穢された誇りを取り戻したいと蠍は言った。

スラムは自由だからこそスラムだ。力が全ての世界ではない。力もその自由の一つに過ぎない。ハロルドⅡファグナーの秩序もローランドⅡイフタスの正義も、所詮は自由を縛る枷に過ぎない。

もう一つ角を曲がると、向こう側は過度の光に満ちていた。どうやら表通りに辿り着いたらしい。

表通りに辿り着くと、即座にイーストゲートに向けて駆け出す。

「69」はイーストゲートのすぐ側だ。走ればここから数分も掛からない。

その時、唐突に、背筋に強烈な悪寒が奔った。それは明確な殺意を感じさせ、そして何よりも異様とも取れる異物感を齎す。

それに視線を向けた時、焔は悟った。

「こいつには絶対に勝てない」と

それはただ、ゆっくりと歩いているだけだ。黒髪に黒縁の眼鏡、

黒の革のシャツ、綺麗な色落ちのジーンズ、REDWINGのロングブーツ、口元にはラッキーストライク。

凄まじい異物感だった。

視線に気づいたそれが、じつと焰を見詰めた。背筋に嫌な汗が流れるのが分かった。そして異物感の正体分かった。その眼が強く濁っているからだ。

「……何だ、お前」

それが言葉を発した瞬間、身体が強張った。それは焰の脳髓に叩き込む　圧倒的な恐怖を。

後ずさりし、焰は逃げるように駆け出した。恐怖に身体を強張らせながら。

蠍

古いタイプの人間は融通が利かない。だが古いタイプの人間の持つそれは、ある意味での強さだ。

蠍と呼ばれるその隻眼隻腕の男は、もう四十に届こうかという年齢だ。鍛え上げられているとはいえ、その肌から艶は失われつつある。だが大切なのは経験をも含めた強さだ。蠍にとってそれが失われ穢されることが何よりも耐え難い屈辱だった。

ただハロルドはファグナーと遣り合うということは、綺麗事では済まされない。周囲を含めた己の全てが壊されてしまうことすら覚悟しなくてはならない。奴はこのイーストエリアの王なのだから。

この数年でファグナー・ファミリーは、蠍の予想を遙かに超える早さで巨大化した。結果アッパーグラウンドの連中が見過ごす事が出来なくなり、連中はファグナーを弱体化させる為、ロイヤル・ファミリーとの抗争を企てた。

バー「69」のカウンターで、蠍は冷えたトマトジュースを口に含む。戦士として、酒に酔い不覚を取ることが赦されない。隻眼隻腕なつてよりこれまで、蠍は酒を口にすることがない。

ハロルドに送った暗殺者は、ドナルドに殺されたらしいと情報を得た。あの暗殺者で奴を殺せないとなると、もう暗殺という手段は選べない。あの男は、蠍が雇える最高の暗殺者だったのだ。

だが、手段がない訳ではない。遠回りになつてしまふが腕の立つ者を集め、戦いを挑むことも出来る。ただ組織としてファグナーは相当にデカい。連中と遣り合うのだとしたら、半端な者と手を組んでも意味はない。

そこでまず思い付いた人物は、あの地獄の監獄での知り合いだった。つい一ヶ月前に出所してきたという。奴の力はどうしても欲しい。それに確か奴もハロルドとは因縁があったはずだ。なら説得次第で手を組めるかもしれない。

「蠍、やっと捕まえた」

唐突に聞こえた声は、若く張りのある低い声。荒い息はそれだけ焦っていたからか。

「……焰か。何の用だ」

「何の用も糞もあるかよ。お前ハロルドに狙われてるんだろ？ いいのかよ、こんな目立つところにて……」

「昔の知り合いと会うんでな」

「……昔の知り合い？」

焰は蠍の隣に座ると、バーテンダーにジントニックを頼んだ。

「そいつは使えるのか？」

「ああ、使える。俺よりも弱い俺よりも恐い奴だ」

その瞬間、焰の顔が引き攣った。そして恐る恐る蠍にこう問うた。

「……そ、そいつつてもしかして、黒髪で眼鏡掛けていて、目の瀬んでる悪霊みたいな男か……？」

蠍は焰の顔を見た。どうやらイツてる時の骸に会ったらしい。

あの監獄にいる頃も、処方薬の大量服用で頭がイクと、奴の周囲には死人が出た。

「まあ、間違いなく奴だな。殺されなくて良かったな、機嫌はマシだったらしい」

バーテンダーがジントニックを運んできた。それを奪い取ると、焰は一気にそれを空け、グラスをカウンターテーブルに叩きつけた。

「何なんだよ、あいつは。あの眼は相当な悪党だぞ？」

「まあ多少特殊だが、俺と同じ第62監獄の生き残りだ」

「なんでイーストエリアに二人もあの監獄の生き残りがいるんだよ……」

「……それはここに奴がいるからだ」

唐突に生まれたその気配に、焰は硬直した。蠍は視線を向けると、ゆっくりと左手を差し出した。

「久しいな、骸よ」

「息災で何よりだ、蠋螂」

骸は差し出された左手を無視し、蠋螂の隣に座る。今の骸はやはり、ドラッグで相当イッてるようだ。まあドラッグが切れるとそれはそれで興奮状態から凶暴になるのだから、どちらがいいとも言えないが。

骸はバーテンダーに、きんきんに冷えたミネラルウォーターを頼む。

「それで何の用だ。俺には時間がないんだが」

「お前はあの五人を殺したい。そうだな？」

「ああ」

「俺はフアグナーを潰したい。目的は違っても当面は手が組める。違うか？」

骸の澀んだ眼が、じつと蠋螂を見据えている。それはまるで、蠋螂の心を探るかのような視線だった。

バーテンダーがミネラルウォーターを運んできた。そして妙な空気に首をかしげる。

「……それでこっちの面子は？」

「どうやら信頼してもらえたらしい。」

「俺とお前、それとこいつだ」

その言葉を聞いた瞬間、焰はまた顔を引き攣らせた。確かに蠋螂を助けるつもりでいたが、まさかこんな危険人物まで行動を共にするとは思っていなかった。

「……俺と眼を合わせただけで逃げ出したこのガキが？」

「そう言うな、これでも相当使える」

苦笑した後、蠋螂はヨレヨレの安煙草を啜え、火を点けた。ゆっくりと息を吸い、そして紫煙を吐いた。

「……キルを捜す」

「同窓会じゃねえんだぞ」

「あの監獄の出所者が三人揃えば、ハロルドは絶対に無視できなくなる」

「だが生きていたとしても、キルはもう相当な老齢だろう。大体俺達の二十年も先輩だぜ」

伝説の殺人鬼「キル」は、ある男にレイプされた妹の復讐の為に、老若男女、何人もの人間を惨殺した。最後に殺された男以外は全くの無関係者。キルはレイプされた妹のことが表ざたになる事を恐れた。そこでとつた行動が、無差別連続殺人と見せ掛けて、実は最後の一人だけが標的という最悪の行動だった。

最後の一人を殺した直後、無数の銃弾に倒れたキルだったが、奇跡的に一命は取り留めていた。そして第62監獄に二十年間収監された。死刑、無期懲役ではなかったのが不思議だが、どうやら何か事情があつたらしい。それについてはどう探っても情報は手に入らなくなっている。

「小僧、お前はキルを捜せ」

「あ、いや、それは……」

「……捜せ」

骸に睨み付けられると、焰は慌てた様子で席を立ち、バーを飛び出していった。

「あんまり遊ぶな。あれはあれで結構繊細なんだぞ」

「最近のガキが繊細？ 何の冗談だ」

苦笑する蠅螂に骸はにたりと晒い、そして手元のミネラルウォーターのタンブラーを傾けた。

思索

ハロルド・ファグナーと遣り合うということは、ファグナー・ファミリーと遣り合うということだ。

簡単なことではない。独りで戦うには相手がデカ過ぎる。

骸が独りで戦えた理由の一つは、戦う相手があの五人に限定されていたからということと、情報を集めた段階で、どうも5人を消さなければならぬ事情がファグナーにありそうだと気付いたからだ。だが、常に状況は変化していく。

そこまで調べた段階で、椿は大きく溜息を吐いた。どうもまた、厄介ごとに首を突っ込んでしまったらしい。

骸に対する複雑な感情から、帰ってきた彼について色々調べていた。彼があの第62監獄に収監されていたのを知った時には、さすがに驚いた。あそこから生きて帰ってくる人間がいるなんて、信じられなかった。

それ以上に、どうして骸が第62監獄だったのかが分からない。あそこは主に懲役二百年を超える重犯罪者や性質の悪い死刑囚が収容される、正しく地獄だ。

逮捕された頃の骸の容疑といたら、ドラッグの不法所持程度だ。当時の彼は基本的に無意味に他人を傷付けることは出来なかったチキンだったし、傷を付けていたとしても懲役二百年なんて在り得ない。

そこまで調べたところで、椿はローランド・イフタスに辿り着く。当時ローランドとハロルドは酷く敵対しており、いつ抗争が始まってもおかしくない状態だった。だが少なくともローランドにしてみれば、強いカリスマ性で統治し、ある種最低限度のルールを布くハロルドは、スレイブ・ファミリーのボーイよりはマシだったはずだ。そこで二人の間に、ある種の取引があったのだと椿は思った。でなければ骸が第62監獄に収監される意味が分からない。

「……姉さん、調べるのは止めた方がいいよ？」

「分かっているけどさ、納得できないんだもんよ」

元々頭の程度なんざ知れてる。嗜む程度とはいえ、ドラッグを使っている頭は記憶力も結構怪しい。だからこそ全てをノートに記す。記すとはいえども難しい単語は全く使わない。いや、使えない。だがそうやって記し整理することが、真理に辿り着く近道だと椿は知っていた。

ボリボリと頭を搔くと安煙草を啜えて火を点けた。普段はあまり吸わないが、ストレスが溜まると妙に吸いたくなる。

「大体、そんなことを調べてどうするのさ」

「……どうするって、ただ気になってしょうがなくてさあ」

椿にしてみても、調べたからといって骸の助けになるとは考えていない。大体、いくら過去に色々とあつたからといっても骸の為に死ぬのはごめんだ。

あいつとのセックスは信じられないほど気持ちよかった。それは確かであり、それ以来ずっと引き摺ってきた。

だが他の女にご執心の馬鹿男に、命を賭ける必要なんて感じない。だからこそ、知っておきたかった。あの糞女のことをずっと忘れないう骸が、一体どうなってしまうのか。どうしてそうなってしまったのか。

どうせ最後にはファグナーやコブラが邪魔者の痕跡すら消してしまふのだから、それを胸の内に留めておきたいと思った。

『あの男、結構邪魔臭くてさあ。別にいいじゃん、私の勝手なんだから、誰を気に入って財布くれてやるうがさ』

その時のあの糞女の顔を椿は絶対に忘れないだろう。あの女は飄々とした笑顔で相手の懐に入り、そして金を拵っていく。あの糞女に憑かれた男の末路は、常に滅亡だった。いや、別にそれを責めるつもりはない。自分だって相手に睡眠薬を飲ませ有り金頂く程度の悪事はしているのだから。

だけど娼婦には娼婦の仁義がある。守るべき最低限度の規律はあ

る。金は雫つても命は取らない、相手の事情に踏み込まない、仕事に私情を挟まない、例え父親が相手でも客ならば抱かれる、挙げればキリがない。

あの糞女を気に入った男どもは皆、気付けば断崖の上で震えていた。もう飛び降りるしかないという、極限状態に追い詰められていた。

「ねえ姉さん、灰が落ちるよ」

タイニイの声に我に返り、椿は煙草の灰を灰皿に落とす。どうも考えれば考えるだけ深水にはまってしまっそうだ。

椿はまたノートに視線を落とすと、小さく溜息を吐いた。今更ながら分からないことが多すぎる。

大体どういう理由でファグナーはあの五人を監獄から救い出したのだろう。助け出したのにどうして骸に狩られるのを黙認しているのだろう。あまりにも妙なことが多すぎる。ロッドや加地が殺されたというのに、所轄警察は目立った動きを見せない。

ローランドの率いるコブラが裏で動いているという情報もあるが、それも定かではない。

それ以上に気になるのは、ノースエリアのロイヤル・ファミリーが兵隊を集めているという嘘か本当か怪しい情報だ。しかもその理由がファグナーとの抗争だというから面白いが笑えない。

ただここ数年、確かにファグナーは勢力を猛烈な勢いで伸ばしてきた。そう考えるとロイヤルが危機感を覚えて当然かもしれない。

「ねえ、タイニイ。パパから情報ってないの？」

「そんな色気のない話、旅行ではしないよ」

至極最もな答えが返ってきた。確かにホモセクシャルであれなんであれ、お忍びの避暑地旅行で血生臭い話はしない。

どちらにしても、かなりややこしい話になってきた。ローランド達、コブラの動きも気になる。あのローランドが、ロイヤルとファグナーの抗争を黙って見ているはずがない。

椿はタイニイの差し出すホットミルクを一息に空ける。そして豪

快に鼻息を吐いた後、また頭をボリボリと搔いた。

なんだろう、妙に気になる。何が気になるのか、それすらはつきりもしないが、それでも何か引つ掛かる。やはりこの頭にはドラッグが入りすぎているらしい。そんなことすら分らない。

「……頭、痛あ」

「頭なんか普段滅多に使わないのに、無理するからだよ」

「余計なお世話よ。あ、タイニイ、今なんか持ってたない？」

「僕がドラッグ嫌いな知ってるでしょ」

「あ、やっぱり？ ヤダねえ、健康優良不良少年は」

期待していた訳ではないが、タイニイのナチュラルドラッグ主義にも困ったものだ。確かにドラッグは身体に悪いが、それで別段タイニイに迷惑を掛けている訳ではない。それなのにタイニイは椿にナチュラルなモノを押し付けようとする。勿論、それがタイニイの好意からだとは分かっているが、それでも自分の生き方は自分で決める。その程度の自由は欲しいと思う。

ただ、椿がタイニイを弟のように思っているように、きっとタイニイも椿を姉のように思っていていてくれるはずだ。そう考えると姉としては確かに示しが見つからない。ドラッグを弟に窺められるなぎ、恥以外何物でもない。

「……ホットミルク飲みたい」

「うん？ 分かった、ちよっと待ってて」

照れ隠しに本当は好きではないそれを頼んで、椿はソファに顔を埋めた。

悪臭

「……そうか」

腕の中で小さく荒い息を吐きながら、ニツキーは調べ上げたことをローランドに報告していた。

色気のないセックスなど最も腐った行為だとローランドは思っている。だが、事が事だけに緊急性が高かったらしい。

最近妙に溜まっていたので、アパートの玄関を入った瞬間、ニツキーをその場で押し倒した。ニツキーは少し抵抗しながら何かを話そうとしたが相手にせず、後は気が済むまで二時間ほど抱き続けた。「って、いうか、ボス、こういう、時は、話、ちゃんと、聞いて、下さい、よ……」

そう言いつつも、ニツキーの表情は満足そうだ。快楽と興奮から朱色に染まった素肌が美しい。

こいつと関係を持った時には、まだ処女膜が破れて間もなかったらしく、初々しい反面で積極性などカケラもなかった。ローランドはじつくりとセックスの愉しさと悦びを教えた。結果、今ではいい感じに自分好みの女になった。

「だがロイヤルだって馬鹿じゃねえだろ。上がやれって言ったからってサルじゃあるめえし」

「そ、それは、そう、なん、です、けど……今回は、やるしか、ないんです……」

「……あん？ 理由があるってことか」

「ええ、マクニコル、財閥が、ドナルドの、身柄を、求めて、いて……」

「ならフアグナーと交渉すればいいじゃねえか」

「だから、ハロルドが、断ったん、ですって……」

だがいくらなんでも、ドナルド・ウラニウムの身柄だけで抗争を起すことはないはずだ。だが奴がマクニコル家頭首の私生児であ

ることや、マクニコル財閥を揺るがす何かを持っていた場合は話が別だろう。そして論理は飛躍していても、そう考えた方が今回は筋が通っている。

「……他には？」

「え、えーと、関係があるかどうか、分からないんですが、知り合いのハッカーが、マクニコル財閥系、のシンクタンクを、ハックしたんですよ」

やっとニッキーの息が落ち着いてきた。余韻が抜けてきたらしい。「それで？」

「……第62監獄を始めとした、各監獄の犯罪者の、研究資料なんです」

「……政府機関じゃなくて、マクニコル財閥なのか？」
「妙な話でしょう？」

ローランドの脳裏には様々な事象が渦を巻いていた。ハロルドが上からの命令を蹴ってまで、どうしてドナルド・ウラニウムを守る必要があるのか？ ロイヤル・ファミリーとの抗争がもしも、奴を手に入れる為だけの行動だとしたら、一体どうということなのだろうか？

「……ニッキー、ハックしたそいつは何者なんだ？」

「ええっと、個人的なツテです、個人的な」

「だから誰だ」

「……昔の男です。ハッカー仲間でした」

ニッキーの言葉はあまりにも沈んでいた。ローランドはそれに気が付かない振りをしながら、ニッキーの肩を強く抱きしめた。

「心配すんな、お前は俺のモンだ」

「馬鹿言わないで下さい。私はマトモな男と結婚します」

「お前にそんな器量はねえよ」

「あ、酷い。それでも色んな男に誘われてんですよ」

互いに顔は見えない。互いが微妙な位置に存在しているのは分かっている。素直になれるはずもない。

ニツキーの肩を抱きながら、ローランドは虚空を睨みつけた。ニツキーはサイドテーブルの煙草を取り、それをローランドに啜えさせ火を点ける。

ローランドは煙草の端を強く噛み締めた。それをニツキーは不安げに見詰めていた。

これは屈辱だ。このイーストエリアで好き勝手しようとしている連中がごまんといる。ハロルドと遊んでいられる内はまだよかったが、ロイヤルやマクニコル財閥まで絡むとなるともうただでは済まない。

ここは己が守る愛すべきスラムだ。ここが弱くだが逞しく愛しい人間を守る為に、法という正義を翳し敵対する者は女子供であれ消してきた。それら全ての犠牲に対して罪を悔いてもきつと、誰も赦してなどくれないだろう。彼らに償うことなど出来ようか。

だが正義とは、絶対でなくてはならない。一分の揺るぎも許されない。許してしまえばそれは隙になり、そしてまた多数の人間が傷付く。

「……ニツキー、コブラを召集しろ。スラムを守れるのは俺らだけだ」

屈辱は返すべきだ。己のプライドを捨ててまで守ってきたこの穢いスラム、それを壊されることを黙って見ていることなど決して出来ない。

「了解」

ニツキーはローランドを見詰めていた。この男の持つ信念と臆病さは、きつとこの男を強くも弱くもする。だがローランドだからこそ、このスラムを守り続けることができた。現実から目を逸らさない。だからこそ臆病になる。だがだからこそ法の番人でいられた。そしてだからこそ、ローランドはローランドなのだ。

ぞくぞくと背筋を快感が奔った。ニツキーは何度もこの男の眼に強烈な意志が宿るのを見た。

彼は今までのどんな男よりも魅力的で魅惑的で、そして悪臭い匂

いを放つ男だった。その悪臭さは一度嗅ぐと病み付きになる。

そしてきつとこの男のそれを愛することが出来るのは、自分だけだと思っている。きつと他の女はただ「臭い」は鼻を掴み口を尖らすに違いない。だが他の女は知らなくていい。いや、知って欲しくない。この感覚はきつと「D」よりも何倍も強烈な快感だ。

きつとハロルド「ファグナーや骸、蠍のような悪党も持っているに違いない。女を虜にしてしまうような強烈で凶悪な悪臭い。知ってしまった女はもう逃げられない。それを嗅がなくては気が狂ってしまう。誇張でも法螺でもない。少なくともニッキーは知っている。ローランド「イフタスというこの不良刑事の持つ圧倒的な魅力」を。

この男を守るのは、私だ

目の前にいるこの男は、全てを捨ててこの穢いスラムを守ろうとしている。アツパーグラウンドの人間に逆らって、無事でいられるはずがない。だがそれでも、ローランドは立ち向かおうとしている。きつと周囲は敵だけになる。

「もつと抱いて下さい……」

自制が利かなくなる。自分の吐息が熱く甘いと分かっていった。体中がその悪臭いを求めている。それは凶悪なまでに身体の芯を火照らす。

このアパートのこの部屋にいる時だけは、私だけを愛してくれる。だからもつともつともつと、ローランドのそれを嗅ぎたい、一つにつなかりたい、最奥に欲しい。

甘えるようなニッキーを見たローランドは、そのままニッキーを乱暴に押し倒した。

「……ちっ」

小さく舌打ちをし、骸は東の空の鮮烈な朝日を睨み付けた。

螻螂の説明を間に受ければ、ファグナーの現状はかなりマズい。

確かにファグナーは巨大化した。数年前はイーストエリアに根を張る新興マフィアに過ぎなかったが、今ではトーキョー最大組織であるロイヤル・ファミリーと対等に話が出来るようになった。

ロイヤルのように礼儀作法なんぞ守りもしない為、ある意味ではロイヤルよりも性質が悪い。

だがこの場合、その性質の悪さが裏目に出た。トーキョーのスラムに根を張るマフィアのほとんどは、アッパーグラウンドと呼ばれる上級市民に上納金を支払っている。

アッパーマーケットを支配するのは企業政府と呼ばれる巨大財閥であり、トーキョー最大の財閥がマクニコル財閥だ。

マクニコル財閥に目を付けられた理由について、螻螂はファグナーが巨大化し過ぎたからだと言っていたが、どうも骸には納得がない。マクニコル財閥は巨大で強大だ。そしてアッパーグラウンドの組織だ。はっきり言って連中は、スラムの組織がどうなるうと知ったことではないはずだ。

ロイヤルが潰れファグナーがスラムを纏めるのならば、結局上納金には差がない。むしろロイヤルよりも素直に金を出すかもしれない。何よりも上の連中が持つ戦力は、幾ら凶暴だろうが所詮スラムのマフィアが相手に出来るレベルではない。

ならばどうして、という疑問が当然湧く。螻螂はファグナーの動きをずっとトレースしていただろう。その螻螂でも知り得ぬ情報があるということだろうか。

「……薬でボケた頭で考えても無駄か」

頭を搔いて苦笑する。螻螂は隻眼隻腕だが頭はいいし切れる。骸

のようにドラッグに汚染されている訳でもない。その蟻螂が集めた情報なのだから、骸が集めるよりも遙かに効率がいいし的確だろう。しかし蟻螂も変わったものだ。あの監獄にいた頃、奴には用事があっても近づかなかった。一つはその名が示す通り、理由もなく欲望で人人間を切り裂いていたからだ。確かに当時から武士道精神にも似たスクイツクな考え方をしていたが、一度火が憑くと誰かが死ぬまで止まれなくなる。そんな危険人物だった。

蟻螂とハロルドとの因縁は知らないし、知る必要もないだろう。知ったところで何も変わらぬし、知ったからといって同情することもない。第62監獄にぶち込まれていた以上、大小関わらず悪党に違いないからだ。ただ少なくとも自分より悪党に違いないと思う。

明け方のイーストゲート周辺は活気に満ちていた。ゲート周辺は早朝から市が立つ。子供を連れた母親や、目覚めの早い老人など善良な市民が各々笑顔で買い物をしている。

骸には最も遠い存在である彼ら。

こんな小汚いスラムで必死になって生きている哀れな働き蟻。企業政府からは不法滞在者と狩られ、マフィアには財産を奪われる。だがその哀れなはずの彼らの笑顔は、あまりにも眩しい。決して手の届かない彼らのような幸せに、多少哀しくもなる。そして彼らの笑顔を見ていると、あのローランド・イフタスがこの小汚いスラムを守るうとしている理由も何となく分かる。

ローランドは間違いなく、自分やハロルドのような悪党とは一線を掻く存在だ。骸やハロルドには正義などないが、奴には明確な正義がその胸に在る。その正義を貫くことで誰かが死のうとも、その結果このスラムの弱者が守れるのならばそれでいいと考えている。

正しさの意味をよく理解しているからこそ、奴はそこまで真つ直ぐに生きられるのだろう。骸には決して真似できない。

「よっ、その兄ちゃん、この林檎でも買って食いなよ。ひでえツラしてるよ」

唐突に声を掛けられ現実に戻された。視線を向けると、それ

は新鮮な果物をカート一杯に載せた果物売りの親父だった。妙に人懐っこい笑顔をしていて、きっとこれに騙されて果物を買う人間も多いだらうと思わせた。

「林檎か。そういえばもうずっと食ってないな……」

考えてみれば、最後に食ったのは第62監獄に投獄される随分前の話だ。林檎を手に取り、その表面をTシャツで拭いてみると、林檎は艶やかに輝きを誇る。

不意にその美味しそうな輝きに眼を奪われた。味覚など当の昔に消え去っていたはずだ。それを持ったままではあの監獄の飯は食えない。それほどまでに酷い餌だった。その失ったと思っていた味覚が、唐突に蘇った気がした。口の中に唾液が溢れている。

「親父、幾らだ」

「へい、五ドルで」

骸は手に持っている林檎を丸齧りした。少しの酸味とシヤリシヤリとした歯応えの後に、甘い果汁が口いっぱい広がる。

「お、おいちゃん、どうしたんだ一体……」

親父に声を掛けられて気付く。頬を涙が伝っていたことに。何てことはない、失ってしまった全てを捨て切れる筈もない。忘れ得ぬ何か常には心にはある。翠を失ったあの頃から、一体幾つ大切な何かを捨ててきたのだろうか。そうして得たのは罪と罰と連鎖する怨恨。あの五人を消したところで、翠は蘇らない。五人を消せば五人を大切に思う何者かの怨恨を買う。連鎖するそれを止めるには、誰かが断ち切らなくてはならない。

「親父、林檎ってこんなに美味かったんだな」

「なんでい、ムシヨにでも入ってたのかい。だがもう出たんだろ。これから幾らでも食えるじゃねえか」

そうか、失った全てを振り返るのではなく、これから手に入れることのある何かを追えばいい。それでまた、美味しい林檎が食える。幸せとはなんて単純な仕組みだろうか。

「ありがとよ、親父。また寄らせてもらう」

「毎度あり」

涙を拭い、骸はまた林檎を齧った。その甘酸っぱい味はいつまでも舌先に残っていた。

慟哭

その男はコートの襟で顔を隠しながら、早朝の裏路地を急ぎ足で歩いている。男の左目の横には深い切瑕が刻まれている。男の眼は休みなく動き、油断なく周囲を見回している。

その目前に突然、一人の四十男が立ち塞がった。褪せたブロンドの短髪に無精髭、アーミーグリーンの上シャツにアーミーパンツ、ドクターマーチンのロングワークを履いている。

「……ローランド・イフタス」

「貞、どこに行くつもりだ、貴様」

貞は顔の瑕を指先で掻きながら小さく溜息をついた。何しろ自分はここで顔が知れ過ぎている。顔を隠したくらいで逃げ遂せるとは思っていないが、まさかこの不良刑事に絡まれるとは思っていなかった。

「……奴が逃がすとも思っているのか？」

「逃げてみなくては分かるまいよ」

「どこに逃げたとしても、奴は貴様を逃がさない」

「それを放置するのか、刑事のくせに」

「殺されて当然だろうよ、貴様らのような糞は」

貞はローランドの眼をじっと見詰めていた。この不良刑事は悪党であることには違いないが、その手で犯す全ての悪事は、このスラムを守る正義を貫く為に行っている。そして正義を貫く為ならば、人の一人や二人が死んでも意にも介さない。

ローランドの脇のホルダーには、デザートイーグルが強く鈍い光を放っていた。幾ら命中率の低いデザートイーグルでもこの距離ならば外さないだろう。そしてローランドは、骸に対する憐憫と全く別の冷徹な判断で、貞を殺すことに躊躇うこともない。

「……煙草、持っているか」

「……ほれ」

ローランドはアーミーパンツのバッグポケットからくしゃくしゃの煙草を取り出し、一本を貞に啜えさせジツポを差し出す。

貞はそれに火を点すと心底美味そうに息を吸い、紫煙を吐いた。

「人間つてのは欲張りなもんだな。私は太く短く生きていくつもりだったんだが、事情が変わっちまった」

呟く貞の前でローランドは唾を吐く。そしてそれを足で踏みにじった。

「糞が何を一般論なんぞ述べてやがる。これまで踏み潰してきた人間の数を数えてみやがれ」

ローランドは貞に対して強烈な殺意を見せた。ここらでは力が絶対だ。力を持たない者は狩られ喰われ殺される。バンビが跳ねて生きられる世界ではない。だがこのスラムの住人の大半は、その無力なバンビだ。無力な搾取の対象に過ぎない。

五人組はその小鹿を何頭も何頭も欲望の赴くままに狩った。その小鹿達に対して贖罪の気持ちなど湧きもしない。

ここはスラムだ。狩る者の倫理観ではなく、狩られる者の無力が罪になる。

大局的に見れば、ハロルド・ファグナーやロイヤル・ファミリーなどは五人の何十倍、何百倍、何千倍、いや、何万倍も殺している。だが奴らが罪に問われることなどなきに等しい。

それは彼らが力を持つ者だからだ。

だが、それを由としない人間がいることを忘れてはならない。力は同じ性質の力によって打ち消されることがある。そしてそれが、このローランド・イフタス率いるコブラだ。ローランドは力を持つ者に対する倫理観の無意味さを良く知っている。だからこそ、彼は救いようのない糞どもを粛清する。逮捕し、悔い改めさせる無駄を知り尽くしているのだ。

「私は死ぬ訳にはいかない。息子を一人には出来ない」

「お前に子供を殺された親が何人いると思っっている。今更お前が普通の生き方なんぞできるはずがなかるうが」

ローランドは情けも容赦もなかった。泣き落としが通じる相手ではないことは明白だが、貞は少ない可能性に掛けたかった。息子が普通に生きられる人間ならばこうして惨めな生き様を晒す真似はしないだろう。息子は重度の自閉症なのだ。

自分の周囲に金に穢くない人間などいない。息子の将来までの金を託すことの出来る、信頼できる人間などいはしない。どいつもこいつも隙を見せれば根こそぎ金を盗む奴ばかりだ。

だからこそ、死ぬ訳にはいかない。息子の未来を守る為にも、絶対に。

「息子は重い自閉症なんだ。私が死んだら息子はどうなると思う」

「野垂れ死ぬだろうな」

「息子には何の罪もない」

「貴様が狩ってきた命には更に罪などなかったぞ」

貞は煙草を噛み潰し、地面にそれを吐き棄てた。そしてそれを踏み潰すと、ローランドを睨みつける。

この男の言葉は何も間違っていない。ローランドはただ事実を突き付けているだけだ。ただ生きていくだけの命を無作為に欲望のまま狩り続けた。女は犯し壊し潰し、男は面白半分で殺してきた。だからこそ、自分にはそんな権利など残されていないことも分かっている。

だが、それでも息子には何の罪もない、罪などないのだ。

「頼む、見逃してくれ」

「それが貴様の出した答えか」

「ああ、無様でも、生きるんだ」

「無駄だ。貴様の人生はここで終わる」

ローランドが懐のデザートイーグルを抜いて貞の額に押し当てた。ローランドの眼に迷いはない。ただ真つ直ぐに、貞の眼を見詰めている。

「じゃあな」

間髪置かずにローランドは引き金を引いた。重い発砲音が路地裏

に響き、貞はその場に崩れ落ちた。

「知ってつか？ 業は引き継がれるもんだぜ」

アーミーパンツからラッキーストライクを取り出して口に咥える。ジッポで火を点けて、深く息を吸う。そして紫煙を吐きながら、頭をぼりぼりを強く掻いた。どうにも腹立たしい。生きることが望むのならば、どうして運命に抵抗しないのだろうか。

ローランドはローランドの法に従って、貞の粛清を実行した。だがその法という名の正義は、あくまでローランドの正義なのだ。

ここは地獄の底、スラムイーストエリアのど真ん中だ。力のない者は狩られるだけの哀れなバンビだ。

生きるのならば戦うしかない。死ぬことが許されないのならば、立ち向かうしかない。

ローランドは小さく舌打ちをすると、ポケットから携帯を取り出してアドレスを呼び出し、ニッキーを呼び出す。

「……ああ、俺だ。貞の息子のことだが……ちゃんとした里親探してやれ。あ？ 金は幾ら掛かってもいい。……ああ、粛清は終了した」

携帯を切った後、ローランドはアスファルトに唾を吐き棄てた。

やはり粛清の後の煙草は糞のように不味い。

矜持

四十に届こうかというその女性の格好は、一昔前のディスコファッションだ。真つ赤なボディコンシヤスを纏うその派手な外見からは、彼女が医者であるとは誰も思わないだろう。

イーストエリアからゲートを出るとそこは無法地帯になる。スラムよりも更に無法地帯というその周辺では、人の命は一ドル紙幣よりも安い。

ここで医者を営むことは、彼女にとってのプライドだった。巨大なマフィアと警察権力が支配するスラムと違い、ここにはルールなど全くない。小さなギャングは多数いるが、それを纏めることが出来るカリスマはいない。そしてそれがこの無法地帯に暴力というルールを布いている。

そしてここに住む人間のほとんどはスラムにすら居場所がない。スラムの人間のほとんどが、トーキョーの市民権を持たない不法滞在者だ。そしてそのスラムの外に住む人間は、扱いとしては「人間」ではない。この無法地帯に住む人間の多くは、迫害を受けている種族や、遺伝子異常、被曝、伝染病患者など様々な事情を抱える者達がほとんどだ。

「……で、この子をどうしたいんだい」

溜息を吐きながら脚を組みかえる。冴子の前の青年は俯き、何度も何度も頭を横に振った。青年の頬には涙が伝っていた。冴子から診て、もうこの子供に施すことができる治療は、痛みを多少和らげること程度しかない。つまり手遅れだ。

最近この近辺で流行りだした病は相当性質が悪い。致死率は8割を超え感染率もかなり高い。この一ヶ月で百人近くがここに運ばれ、そのほとんどが死んだ。ここの設備ではワクチンなどの精製は不可能だ。

スラムに市民病院がある。そこにサンプルを持ち込んでワクチン

の精製を依頼してはいるものの、市民病院の対応はかなり冷たかった。何しろこの近辺にする人間の大半は様々な問題を抱え込んでいる。そして何よりも金がない。金に価値がない為、ここいらでは物々交換で物を手に入れるからだ。

「先生、お、俺はどうしたら……」

そしてこの子が罹患している病は例の伝染病だ。もう手の施しようがない。全身の毛穴から血を噴き出して死ぬ、その激烈な症状は二百年以上昔にアフリカで流行ったエボラ出血熱などに近い。

だからこそ、もう何もできない。身体中を襲う強い痛みを、マリファナのような麻薬で和らげる以外に手立てがない。

「どうしようもないさね。看取ってあげることしかできないよ……」
医者としてこれほど悔しいことはない。目の前で失われていく命があるのに何も出来ないというそれは、医者としての絶望に近い。

市民病院の医師に知り合いがいる。そいつは元々研究畑の人間だから、こういった新しいサンプルの手に入るケースは歓迎しているだろう。

だがそいつ一人が手を貸してくれるとしても役には立たない。大きな病院だが所詮はスラムの市民病院だ。そこに大きな研究設備はないだろう。研究といっても、医師が暇を見付けて齧る程度のものだということとは否めない。

「……うっ、ぐっ、あああああ……っ」

父親は子供の身体に縋り泣き声を上げた。こういう姿を見て、何度唇を噛んだだろうか。ここはこの世の地獄だ。

ローランドはイフタスが必死になってスラムを守る理由が、この地獄にある。人間は恐怖という規律を失う時、このエリア外のように混沌に陥る。混沌には規律などない。欲望の赴くままに暴れ狂い、そして壊れる。そしてローランドは少なくともイーストエリアをこのようにしたくないのだろう。だからこそ必死になって戦い、守る。

冴子はそれを否定するつもりはない。ローランドの考えは至極正

論だ。だが、正論が全てにおいて正しいとは限らない。ここに住む人間のほとんどは人間としてすら扱ってもらえない。

目の前で泣くこの青年も両腕の他にもう一本、小さな腕が脇腹から生えている。だが、彼に一体何の罪があるのか？ 人間と人間以外との違いとは、腕の数なのか？ 足の数、指の数、頭の数なのか？ それは単なる差別迫害ではないのか？

いや、ローランドは元々引かれていたゲートとフェンスを意識せず使っただけだろう。だがそれが既に差別迫害だ。だがローランドのそれを非難する気にはならない。奴のそれは間違っていないからだ。ここを暴力という規律以外で縛ることは出来ない。

「……もうそれぐらいにしておきな。このままじゃああなたにまで感染しちまうよ」

「俺にはもう誰もいない。……妻も子もこいつに奪われちゃったんだ！」

両手を子供の血に塗れさせながら、青年は泣き叫んだ。その血が最も危険だと告げたところで、彼の一体何が救われるだろうか。きつと青年はそんなことなど当然理解しているだろう。

「あなたが死んでも、嫁さんも子供も喜ばないよ」

「知った風な口を利くな、ど、どうしたなんだ、どうして誰も助けてくれないんだ……。俺が人間じゃないからなのか？……」

青年の慟哭は激しさを増していく。冴子にしてみても救えるものなら救った。こんな地獄で医者をやっているのも、ここで無闇矢鱈に壊されていく命を少しでも救いたかったからだ。己の両手を見詰めた。左右8本ずつある指は親指から数えて6本目以降はただの飾りで動かない。この手の所為で医者としての知識や経験のほとんどが独学だ。臨床経験は以前この診療所に住んでいた爺さんの下で詰んだ。

言い訳になるだろうか。ここしか冴子を受け入れてくれなかった。だからだからそここの人間を守りたいと思う。

だが、権力が意味を持たないここでは、力が全てだ。泣いている

人間はここでは餌だ。狩られ喰われ殺され壊される。

「きつと、誰も助けてくれないよ、ここでは、ね……」

小さく呟いて、青年にタオルを投げた。ここから先は彼が決めることだ。このまま感染して家族の後を追うのか。それとも立ち上がり生きるのか。

青年の慟哭が響く病室を出て、廊下の窓際で安煙草を啜えた。火を点けるとゆつくりと紫煙を吐く。何て不味い煙草だろうか。この近辺の煙草には碌な銘柄がないから元々から不味いが、こういう時の煙草は不味すぎる。

「……骸は大丈夫かね」

彼はこの診療所に多額の金を寄付してくれている。見返りに食欲が全くない彼の為に、ビタミン剤や栄養剤を処方して渡している。Dを常用する彼には気休め程度にしかならないが、それでも多少は身体の為になるはずだ。

煙草を噛み潰し吐き捨て、冴子は頭をボリボリと掻いた。

血刀

「……もう一度、お前を握る時が来るなんてな」

左手に握る一振りの刀を見詰め、蠮螋は物憂げに呟いた。第62監獄に投獄される際、この刀は隠れ家の奥に捨ててきた。出所してくることがもしも出来たとしても、当時の蠮螋にはもう握る必要がなかったからだ。

長い長い時間が過ぎ、奇跡的に出所できた。

別段何か理由があつた訳ではなく、ただ自然に向かった昔の隠れ家の奥で、この刀は埃に塗れて転がっていた。誰かが触れた形跡はあるものの、刃は毀れてもおらず捨てた当時のままだった。

理由などどうでもよく、まるで昔捨てた女が自分を待っていたかのように、刀は蠮螋の手に戻った。

捨てた理由はこれを持つと理性を失った時、周囲に死人が溢れるからだ。身体に染み付いた剣術は相手を選ばず、強きに者に出会えば刀身すら震える。謂わば蠮螋が持てばこれは妖刀の類となる。

だがこの刀自体には銘すらない。日本刀としての出来もきつと刀工が見れば眉を顰めるような類のものにすぎない。蠮螋は切れ味よりも丈夫な刀を求めていたし、そしてこの銘無しはその条件だけを満たしていた。

要はその程度の駄作に過ぎない。

だが、蠮螋には隠れ家でこの銘無しが待つていたことを知ったあの時が忘れられない。あの時に感じたのは、間違いなくこの銘無しからの愛情だった。自分が疎まれているとこいつは知っていたはずだ。だがそれでも、こいつはずっと待つていてくれた。

その頃の女達は皆、自分のことなど忘れてしまっていたというのに。

だが投獄される前と違うのは、もう二度とこいつを抜かないという覚悟だった。抜けばきつと人が死に、そしてこいつをまた手放す

ことになってしまっただろう。それだけはもうごめんだった。

だからこそ、二度と握らないと誓っていた。

だが、もうこうなってしまうてはそんな戯言を言えるはずもない。骸や焰と共にファグナーと正面から戦うと決めたのだ。特殊警棒で誤魔化せる相手ではない。

銘無しを抜き、蠚螂はその刀身に魅入った。そう、この感覚を忘れられるはずがない。背筋を走る強い悪寒と強い快感。二律背反しているそれを内包しているからこそ、人斬りはやめられない。

出会いなど馬鹿馬鹿しいまでの偶然だ。

剣術の基本のある流派で学んだ後、実戦で技を磨いた。トーキョーの武術道場を木刀一本で片っ端から道場破りし、腕を磨いた。だがある剣術の流派の師範代を叩き殺してしまい、その流派の一門に命を狙われた。

刺客を倒し続けるにも木刀では限度がある。何しろ相手は大きな流派だ。連中は獲物が日本刀だった。四対一の戦い差の際、一人を倒した後とうとう木刀が折れてしまった。獲物を失った蠚螂が咄嗟に握った刺客の刀。それがこの銘無しだった。

「うつくつくつく……ひっひっひっひっひっ……」

嘲笑いが止まらない。またこいつと人が斬れる。あの逢瀬の時がまた訪れることなど考えてもいかなかった。

人間は殺される瞬間が最も美しい。生きているのにもう死んでしまふという矛盾したあの一瞬には、生と死が深く混じり、そして同時に白い肌を紅が染め上げていく。肌は白から蒼に変わっていき、そして生は急速に死に向かう。

抵抗の激しい男よりも、逃げ惑う女の方がやはり美しく死ぬ。だからなのか、格闘家や剣士などを殺しても大して美しくならない。だから女、か弱い女がいい。

ただ、例外もいる。

それは強烈な存在感を持つ存在。ハロルド・ファグナーやローランド・イフタス、ドナルド・ウラニウム、骸のような存在だ。悪党

がほとんどののは連中が殺しても罪悪感すら抱かせないからだろう。連中は悪の華だ。きつと殺せばそれぞれが美しく咲くことだろう。

抜けばどうしても斬りたくなる。それはどんなドラッグよりも強烈な快感だ。今まで普通に生きてきた存在にそれを突き付け、問うのだ。

「生きるか死ぬか、選べ」と　　なんとという傲慢で美しい問いだろうか？

どんなに素晴らしい人生を歩もうとも、この問いの前にはその全てが無意味となる。生きるのか死ぬのかを問うても、結果は変わらない。この銘無しの前では全てが死に染まる。

だがそれでも問うことがどういう意味を持つのか。

隻腕になろうが己の強さには微塵の不安も感じない。隻腕の不由さにも慣れたしなによりも銘無しの使い方は自分の身体が覚えている。

そしてハロルドⅡファグナーに不覚を取り隻眼隻腕になったあの時も、もしもこいつが手元にあつたとしたら、間違いなくその場にいた全員を斬り伏せたと思ってしまう。

そういえば、ハロルドが大切にしている女がいたことを不意に思いつく。あの女は美味そうだ。気の強そうな目や豊富な肉体、艶やかな赤毛と唇、どこをとっても綺麗に咲きそうだ。きつとあの女なら深紅の薔薇のように咲き、そして散るだろう。

蠅螂の目的はハロルドⅡファグナーの破滅だ。そして今、もう一つの目的が加わった。それはハロルドの情婦、レオンⅡシェフィールドを美しく咲かせること。深紅の薔薇のように咲かせ、散らせること。

刀身を魅入る。

何と美しい刀身だろうか。こいつは今まで数多の命を喰い、そして散らせてきた。この刀身が血に染まる時にはいつもイッていた。一物がギンギンに勃ち、何度も何度もイッた。血に染まる女ほどそ

そるモノはない。

頑丈は頑丈だが、やはり刀は手間が掛かる。まるで我儘な女のようだ。数人を斬れば刀は毀れてしまふし、斬り方を誤れば刀身が曲がることすらある。だが手間の掛かる女ほど可愛いものだ。そしてそれは刀も同じだ。毀れれば研ぎ直し、曲がれば伸ばす。その繰り返しだ。

そしてこの可愛い女はとにかく嫉妬深い。

彼女以外の誰かに目を向ければ拗ねてしまふ。

だからこそ、斬る。彼女と自分が満足する相手を探し、斬り殺す。夢中になり繰り返し続けた結果、螻蛄は辻斬りとして名を馳せそして逮捕され、第62監獄に投獄された。

老若男女、美しく咲く相手ならば誰彼構わずに斬つたのだから当たり前だろう。自分が殺した数を数えてはいなかったが、担当の検事が48人とか何とか言っていたはずだ。だがもしもそうだとすると、数に大した意味は無い。納得が出来る花を咲かせて散つた連中など片手で数える程度に過ぎない。

大体、美しくない花を咲かせて散つた連中の人生は無駄なモノに満ち溢れていたのだと想像は付く。肥え太つた見るも無残な雌豚は殺しても所詮豚だった。権力にしがみついていた糞爺を殺しても咲いたのは食虫植物のような美しさの欠片もない代物だった。

芯がない人生の歩み手には、相応の花しか咲かない。そして散り様も悲しいほどに無残なものだった。

この彼女にまた、血を吸わせることが出来る。彼女をまた、紅に染めることが出来る。人を美しく咲かせ、そして散らせるのだ。

随分と彼女に魅入っていたらしい。夜半だったはずが、空が白んでいる。

刀身を鞘に戻し、心を落ち着かせた。

こいつを前にすればどんなに美しい女も輝きを失う。

白んだ空を見上げながら、螻蛄は背筋に残る余韻に心を震わせた。

またあの頃のように戻れると。

鉄拳

今でこそ、イーストエリアを牛耳っているのはハロルド・ファグナー率いるファグナー・ファミリーだが、以前はもう一つのファミリーがあった。それはボーイという男が率いるスレイブ・ファミリーという武闘派集団で、彼らの掟はたった一つだけだった。その掟とは単純明確で、「強い者がボスになる」というものだった。

ボスが決定したことは絶対で、それを否定する為にはそのボスを倒せばいい。ボスの強さが中途半端だと、ボスがコロコロと変わり安定しないが、ボスの強さが飛び抜けているとこういう単純明快な組織は強烈な力を持つ。

そしてボーイという男は、イーストエリアにおいて素手の喧嘩では無敗を誇り、彼が率いているスレイブ・ファミリーは、暴力的な支配をするがある意味での芯が通った硬派の組織だった。

まだ小僧に過ぎなかった頃に焰は、ボーイの生き様に憧れを抱いていた時期がある。今でこそ彼の組織が、実はとても危ういバランスの上に成り立っていたことを理解しているが、当時は拳一つでの成り上がりに興奮したものだ。

だがここでの現実を思い知らせたのは、ボーイを暗殺したハロルド・ファグナーだった。ボーイを殺す為に必要だったのはたった一発の銃弾だった。喧嘩がどれだけ強くとも、一発の銃弾には勝てない。組織に必要なのは腕力ではなく、出来事をコントロールする知恵と権力なのだと思った。

だが焰はそれでも、ボーイという男の価値はその拳に宿る力だと確信している。

キルの情報を集めている内に、妙な情報を手に入れた。それはハロルド・ファグナーによって消されたボーイが実は生きていたという情報だった。安易には信じられないものの、別角度から物事を洗うバーバラからの情報を加味すると、あながち嘘とも言い切れない

と考えた。

それはボーイの死体が未だ発見されていないという、ファグナーによって隠されていた事実を知ったからなのだが、だがもしそうだととしても、そういう安易なミスをあのハロルド・ファグナーが犯すとも見逃すとも思えなかった。

事實はファグナーに問うしかない。そしてそれに答えることは決してないだろう。

「……あなたがボーイなのか？」

「……なんだ、貴様は」

ある裏路地の小さなバーの玄関先に座り込み、その黒人少年は拳にバンテージを巻いている。口元にはセブンスターを啜え、足元にはウイスキーの瓶が置かれていた。

良く考えると、スレイブ・ファミリーのボスはどうして「ボーイ」という仇名なのだろうか。その疑問は当然持つべきだったはずだ。そして今まで収集した情報の中に、どうして彼の外見の情報が欠如していたのだろうか。

それは全て、彼の居場所を捜し出した焰の眼に映されていた。

彼の外見は黒人の少年そのものだ。ファグナーと抗争をしていた頃から十年の月日が流れているというのに、彼の姿は少年のままだ。十年前に赤子だったというならばともかく、どう見ても彼は十歳前後に見えてしまう。だが、その高めのハスキーボイスの持つ威圧感、は蠅螂とでも張り合えそうだ。

「俺達はファグナーを潰す。その為に新しい組織を作っている。ハロルド・ファグナーには恨みがあるはずだ。力を貸してくれ」

こういう男には嘘を吐いても無駄だ。伊達に組織のボスをしていた訳ではない。その眼力は相当だろうし、何よりも焰自身が彼には嘘を吐きたくない。拳一つで組織を纏め上げていた傑物を愚弄したくはない。

「興味ないな。今に満足しているからな」

「嘘だ」

「根拠は？」

「ならどうして、その拳にバンテージを巻く」

ボーイは視線を鋭くし、紫煙を吐く。そしてバンテージを巻き終わるとウイスキーを手に取り一頻り煽った。

「もう権力には興味ねえよ。組織なんざ真っ平御免だ」

「組織といつても、俺らの組織はデカくねえんだ。俺を合わせて三人しかいねえしな」

それを聞きボーイは目を丸くする。そしてさも可笑しそうに咽を鳴らすと、またウイスキーを煽った。

「俺を入れてもたった四人かよ。その人数でファグナーと遣り合う？ 気は確かか、貴様ら……」

「普通なら絶対にやらないだろうな。だが残りの面子があの第62監獄の生き残りだとしたら、どうだ？」

ボーイの眼が怪しい光を帯び、そして揺れた。組織のボスをしていたボーイならば、当然知っているあの監獄の生き残りの内、実に二人が名を連ねているというのだ。それではたった四人とは言わない。十分すぎる数と面子だ。

「イーストエリアならば、一人は蠅螂か」

「ああ、そしてもう一人はついこの前に出所してきた、骸だ」

その名前を聞いた瞬間、ボーイの眼は大きく見開かれた。骸という男を知らないはずがない。自分が使っていた五人の悪党に大切な女を殺され、奴らに何度も復讐を挑んでいた男だ。あの頃の骸は悪党というよりも小悪党かチンピラだった。スレイブでも指折りの悪党だったあの五人に敵うはずはないし、また何よりもあまりにも無謀だった。連中は人を壊すことについては間違いなくプロフェッショナルだ。そしてあまりにも滑稽な骸という玩具は連中にとって最高の娯楽だっただろう。だからこそ殺されることは決してなく、ただ只管いたぶられ続けていた。

ハロルド・ファグナーはボーイを暗殺した直後に、五人の悪党と骸をローランド・イフタスに引渡し、連中は監獄行きとなった訳だ

が、その頃からボーイは違和感を覚えていた。どうして骸を第62監獄に送ったのだろうか。奴はどうみても引き渡された悪党の中で最も雑魚だった。そして、だからこそボーイの脳裏には骸の名前が刻み込まれていた。

「……骸が、生きていたとはな」

「いや、生きていたとは言えないだろうな。今では末期のダウナー系アシッドジャンキーだ。どう長く見積もっても後一年も生きられないはずだ」

「何故だ。どうしてそんな……」

「そんなこた俺じゃなくて奴に聞いてくれ。あんな悪霊みたな奴とは話したくねえよ」

焰が顔を顰めたのを見て、ボーイはまたウイスキーを煽る。監獄にぶち込まれるより以前の骸は、どちらかというと熱くなり易い、根が単純な男だった。だからこそ連中のいい玩具と化していたのだが、同時にその熱は冷め難く不屈とも取れる闘志を持っていた。

そんな男が悪霊と化している。それはある意味でとても興味深い話ではある。あの監獄で一体何が起こり、何が変わってしまったのか。だが十年という月日は、人間を変える時間としては確かに十分だ。

「……今更ファグナーに興味はねえ。だが、その面子でファグナーと遊ぶつてのは確かに楽しいな」

不敵に歪んだボーイの口元を見詰め、焰は背筋をゾクゾクと奔る感覚に酔った。蠍と骸にこの喧嘩無敗の男が加わるという。これは絶対に面白い。こんなエンターテイメントには滅多にお目に掛かれない。

「それで小僧、二人にはいつ会える」

「小僧じゃねえ、焰だ。二人に会うのはまだ先だ。実はあんだじゃなくてキルを捜してたんだよ」

その名前を聞き、ボーイは口をぽかんと開けた。そして眉を顰めるとドレッドの頭をボリボリと搔いた。

「その名前、久しぶりに聞いたな」

「ぶつちやけりや、俺はくたばってると思ってんだが、蠅螂と骸が捜せつつつから仕方ねえ。死んでんならその証拠を見付けなけりや納得しねえだろうしな」

「なんだお前、その二人が怖いのか」

ボーイは焰を馬鹿にするかのように嘲笑うと、またウイスキーを煽る。そんなボーイの隣に座ると、焰は顔を顰めながら舌を出し安煙草を啜え火を点す。

「あんたはあいつらを実際に見てないからそんなことが言えるんだよ。俺が知っている悪党の中でも、あの二人だけは別格だ」

「ふん、楽しみにしておくとするか」

「で、キルについてあんた何か知らないか？ 俺の情報網にゃ引っ掛かりもしねえ」

ボーイは興味なさげにまたウイスキーを煽ると盛大にゲップをして見せ、首を横に振った。

「んなオールドシリアル知るかよ。大体、もしも今もそいつが生きていたとしたら、間違いなく平和に暮らしているだろうよ。邪魔してやるなよ」

「……はあ？ なんでそんなことを分かるんだ」

「キルって男の連続殺人の目的は、妹を犯した屑を妹の件を表沙汰にしないようにしながら殺すことだったんだろ。なら、俺らみてえな根っからの悪党じゃねえ。今もしも生きていたら、平和な余生を過ごしてんじゃねえのか？」

ボーイの言葉には確かに説得力がある。第62監獄から出所した悪党の中でも、確かにキルは特殊だ。辻斬りの蠅螂やファグナーに目を付けられた骸、そして歴史上最悪の犯罪者とされる鴉とは違い、キルには殺人に明確な理由が存在している。そしてキルが生きているとしたら、確かにそつとしておいて欲しいだろうと焰も思う。

「まあ、実際は本人に訊いてみると分からんがな。目的の屑以外の殺人で、キルは女を犯してもいるからな」

「だが捜すにしても情報がねえんじゃないやどうしようもねえな。そういうツテはねえの？」

「俺が表から引退して何年経ったと思ってるんだ」

「そりゃそーか」

焰はさも可笑しそうに笑うと立ち上がる。そしてボーイに手を差し出す。ボーイはそれを握りながら立ち上がり、拳に革の手袋をはめて目元をサングラスで隠した。

「ま、何とかするしかねえだろ」

「そうだな、無駄だとは思うがな」

二人は面倒臭そうに歩き出す。だが眼は不敵に笑っていた。

「あ、そうだ。あんだどうして今でも子供の姿なんだ？ 秘密があるんなら教えてよ」

「俺にもよく分かるのだが、医者が言うにはしたくてもこれ以上成長しないんだとさ」

「ふうん」

焰はボーイの実際の年令を考え、小さく吹き出してしまった。

蠅王*

唐突に現れたそのチームは、組織というにはあまりにも小さかった。だがそのチームの面子を知った者達は一様に驚愕し、中には怯えさえ見せる者もいた。チームの名は「ベルゼブブ」といい、たった一晩でファグナーの売人を十数人消してしまった。その手際の上は賞賛に値する。

まるで姿すらない亡霊のように彼らは暗闇から現れ、売人を狩つてしまう。

そのベルゼブブの面子のうちの二人は、あの第62監獄の生き残りである蠅螂と骸だ。彼らが相手だとすると、いくらファグナーといえども安易な行動は出来ない。

「……ちくしょう、またやられた」

ファグナーの兵隊の中でも組織の掃除屋として使われているその男の名はビッグという。あのスレイブ・ファミリーの兵隊ともマトモに遣り合っていたという古参の豪傑で、愛用しているガトリングガンは敵対する人間を蜂の巣にしてきた。ただその単純な性格はたびたびトラブルを引き起こす。中肉中背であるにも関わらずビッグという酷い仇名の由来は、一食でステーキを軽く5キロは食べるといふその食欲によるものだという。

「そう言いますが、あれだけ神出鬼没だと、手のつけようもありませんよ」

そのビッグの相棒であるビジョンの格好はどう見ても神父だった。七三分けに黒髪、眼鏡、だが眉は剃り落とされ、鋭角にデフォルメされた黒い神父服には、基の落ち着いた風合いは欠片も残されていない。大きく開かれた胸元には十字架が輝いていた。彼は人間を殺すことに躊躇いが無い。彼に言わせれば殺しは報いであり救いであるらしい。

「くそつ、あいつらを狩れば滅茶苦茶金になるってえのによっ」

ビッグは憎々しげに夜空を睨み付ける。金を稼ぐことが出来たとしても、それは相応の危険が伴う行為だ。何しろ相手はあの蠍と骸だ。だがこの男達にとって最も大切なこととは、報酬と力の多寡だ。

「まあ、何しろ蠍と骸ですからね。それでもこの手際の良さは賞賛するしかありません。このスラムの闇を我々よりも知っているとということですから」

「ファグナーに喧嘩を売るんざ、正気の沙汰じゃねえけどな」

「あのお二人はボスに相当な恨みがあるようですね。まあ、そんなこと知ったこつちやないんですがね。他人の事情なんか気にしていたら、この稼業なんざやつてられませんから」

ピジョンは穏やかに微笑みながらそう言葉を紡いだ。二人が歩いている場所は、ファグナーが仕切るイーストエリアの歓楽街、その裏路地だ。こんなスラムの歓楽街でも、表立って出来ることと出来ないことがあり、裏路地では当然のように表立って出来ないことの多くが行われている。

「この辺にはいないようだな」

周囲に視線を向ける。上はどうも甘い。ベルゼブブがたった数人で構成されているとされるからなのか、彼らを狩ることはさして難しくはないと思っっているようだ。確かにたった数人なのだから間違いではないのかも知れないが、正しいとも思えない。

蠍が今までファグナーの構成員を何人殺してきたのかということや、骸は既にあのスレイブの負の遺産である五人の悪党を二人狩っていることなどを考慮していない。蠍と骸、それぞれひとりを狩るのならばともかく、その二人が組んでいるのだから安易にことが進むとは到底思えない。ただそれでもビッグとピジョンにしてみれば、彼らは的に違いなかった。

「ぎゃっ」

不意に耳に届いたのは男の悲鳴だった。ピッグとピジヨンは顔を見合わせると、ピッグはソードオフのショットガンを、ピジヨンはサイレンサー付きのグレッグを抜いて、悲鳴が聞こえた小道へと駆け込んだ。

視線を巡らせると小道の先で一人の男が倒れている。横顔を見たことがある。間違いなくファグナーの売人だろう。背中が一刀の下に袈裟斬りされていることから、どうやら殺したのは相当の腕がある者だ。そして最近の情報の中に、剣の道を捨てたはずの蠅螂が再び刀を持ったというものがあつた。それを考慮すればこの男を殺した相手は想像に難くない。

「蠅螂、か」

ピッグは眉間に皺を寄せながら、不機嫌そうに唾を吐き捨てた。こつもあつさりと裏を搔かれるとぐうの音も出ない。

だが次の瞬間、勘の鋭いピジヨンの背筋を激しい悪寒が奔り抜けた。迷わずグレッグの銃口を死体の奥に広がる暗闇に向けた。それを見たピッグだが、彼は呑気に眼を細めながら暗闇を見詰め、「誰かいるのか」と声を掛けた。

「……ピッグとピジョンだな」

暗闇から声が漏れ、二人は不意に強い存在感を覚えた。だがその姿はどう眼を凝らそうが見えなかった。

「貴方が蠅螂ですか」

「答えたとして、それに意味があるのか」

「どうせ殺るんだから、ねえな」

ピッグは声の主の言葉を豪快に笑い飛ばすと、ショットガンを天空に向けて撃ち、暗闇を睨み付け怒鳴った。

「トンチってんじゃねえんだぞ、ボケッ」

「いえいえ、トンチにはなってますんよ、ピッグ」

「貴様らはどうしてハロルドに仕える」

それは不意討ちのような問いだった。ただ二人にとってその答え

は決まっている。ピジョンは口元に皮肉めいた嗤いを浮かべると、こう答えた。

「金になるからですよ」

『金、か』

「ああ、そうだ。何か文句でもあんのか？」

『金が必要な理由はなんだ』

「話すとも思っているのですか？」

ピジョンの眼は先程から暗闇の声の主を探していたが、どうしてもその姿を捉えることはできなかった。ただ、その眼で捉えることができずとも、それが何処に在るのかを感じることはできている。つまりグレッグを撃つことはできる。また命中させる自信もある。だがピジョンはそうしなかった。いや、正しくはできなかった。それは暗闇に在る何者かが、何かを伝えようとしていることを敏感に感じていたからだ。

「何が言いたいのですか、貴方は」

『ハロルドはイーストエリアの三番街を捨てる』

「……！」

ピジョンの眼が鋭く尖り強い光を帯びた。

『あの孤児院も確か、三番街だったな』

「……何が言いたいのですか？」

『ハロルドとロイヤルの間にどんな密約があるのかは知らん。だが気を付けることだ。奴は敵対する組織に勝つ為ならば多少の犠牲など省みない』

「信じるにも証拠がありませんね」

ピジョンは内心の動揺を押し殺しながら、声の主の真意を探る。

『イーストエリア全体を戦場にするような愚は犯さんだろうよ。三番街はイーストエリアで最もゲートに近い一帯だ。後は自分で調べてみる』

そう言葉を残し、暗闇の声の主の存在感は消えた。

「ちよっと待てや、コラッ」

だが思慮に欠けるピッグにはどうやら全く理解できない話らしい。ショットガンを暗闇に向けると、恫喝するかのような怒声を上げながら無数の散弾を撃ち込む。

「言いたい放題抜かしやがって、嘗めてんのかコラッ、おいっ、どこいきやがった！」

隣で立ち尽くしながら、ピジョンは虚空を睨み付けていた。ボスであるハロルド・ファグナーの性格は良く知っているつもりだ。いい加減で大雑把な性格に見えるがその実、抜け目がなく強かな男だからこそ、若くしてこのイーストエリアを纏め上げることができた。そして彼を補佐するトリスタン・レイ・マクニコルは機に敏感あり、冷静冷徹な判断ができる。

あの二人がファグナー・ファミリーを支配している以上、暗闇の声の言葉が絶対に嘘だとは思えない。

「……調べてみるしかなさそうですね」

小さく漏らしたピジョンの言葉に、ピッグは眼を丸くする。

「おいおい、あんな胡散臭い言葉を信じるのかよっ」

「だからこそ、調べるのですよ」

ピジョンはグレッグをホルダーに戻すと小さく笑い、もう一度暗闇に眼を向けた。

ハロルドが大儀の前に震える弱く小さな命を消すというのなら、それを許す訳にはいかない。あそこには大切にしてきた小さな幸せがある。それだけは失う訳にはいかない。

暗闇に唾を吐き付け、ピジョンは闇に背を向けた。

愚策

「では、従わないというのだな」

「従う理由がありませんので」

ノースエリアの最高級ホテル、そのスイートで二人の男が対峙している。一人はこのノースエリアを主な支配地区としているロイヤル・ファミリーのアンダーボス（幹部）であるアツシハマダ。四十代半ばという若さでありながら、ロイヤルの支配者である「ゴッドファーザー」エリックハブリチエックの懐刀とされている。オールバックに纏めた黒髪、そして漆黒の瞳は、彼が純血のジャパニーズであることを示している。これまでロイヤル・ファミリーのボスはジャパニーズだけが継承してきた。トーキョーを支配している企業政府の後ろ盾がないジャパニーズが、過酷なスラムで生きていくための生活共同体として纏まったのがロイヤル・ファミリーの母体となった組織だ。現在のボスであるハブリチエックは、アップグレードより送り込まれた外様であり、本来ならばハマダを始めとしたジャパニーズがボスを勤めるべきなのだろうが、それも儘ならない状況というものがある。

そのハマダの尖った視線と恫喝を受けながらも口元を歪め穏やかに笑う金髪碧眼の男は、ファグナー・ファミリーのボスであるハロルドハファグナーの古くからの相棒であり、組織のコンシリエール（顧問）であるトリスタンレイマクニコルだ。彼がトーキョーにおいて最も力のあるマクニコル財閥、その会長の孫に当たるのは公然の秘密で、ロイヤルとファグナーが争っている原因の一つとされているドナルドウラニウムは、腹違いの弟だ。

ボス同士が直接会談をすることはまずありえない。彼らの役割は高い場所にある無駄に広く華美なスイートルームで踏ん返り返りながら女を侍らせ、下の者の頭を踏み付けつつ命令を発すことであり、交渉事なんぞは他の雑多がやればよい。

だが同時に、その雑多の能力こそが組織の実力に直結する。そしてハマダとトリスタンはそれぞれの組織を纏め上げている点において組織の核だといえた。

つまりこの会談の結果こそが、ロイヤルとファグナーとの抗争の引金であるともいえる。

「貴様らはアツパーグラウンドの馬鹿どもに喧嘩を売っているのだぞ。確かに連中は糞だが力がある、それは理解しているはずだ」

「だからファミリーに忠誠を誓うソルジャー（構成員）を差し出せと？」

「糞の相手は面倒だ。穏便に済ませ方が楽だろうか」

眉間に皺を寄せるハマダを見れば分かる。この男もまた、この事態をアツパーグラウンドに強いられており、それを晒って楽しんでいる上等な市民どもを嫌悪しているのだ。スラムにおいて巨大な力を有するロイヤル・ファミリーでも、企業政府が有する政府軍を相手に戦争はできない。世界有数の国際都市であるトーキョーの政府軍はそれだけ強大だ。

それ以前に、ボスがハブリチェックである限り、ロイヤル・ファミリーは牙を抜かれた獅子のようなものだ。

「ただでさえファグナーはお前と دونالد の件で上から睨まれてんだ。これ以上、面倒事を下に持ち込むじゃねえよ」

「同時に私と Donald が、スラムに大きな利益を齎していることもお忘れなく」

トリスタンは笑顔を崩さず、実にあっさりと言葉を返した。トリスタンと Donald、この二人がパイプとなっているからこそ、スラムの各勢力はドラッグ等の嗜好品や危険な娯楽番組の放映権でアツパーグラウンドを相手に大きな利益を得ている。

それらをファグナーが独占することはさして難しくもない。だがそれは無駄な抗争を生む結果となっただろう。そのバランスを一切ら全て説明されなければならぬほどにハロルド・ファグナーも馬鹿ではない。

「ドナルドの小僧、奴は何を仕出かしたんだ？」

ハマダの不意打ちのような問いに、柔らかく微笑んでいたトリスタンの眼が、鋭く尖った。それは組織の強面どもを萎縮させるほどの眼力を持つハマダですら、背筋に悪寒が奔るほどの鋭さと冷たさだった。

「問うな、そういうのか」

「知ったところでどうにもなりませんよ」

「ならば潰す、それだけだ」

「できると思われるのならば、どうぞ」

トリスタンは鋭い視線を突き刺しながら、サイドテーブルに置かれたワイングラスを手に取りそれを口に含んだ。そしてまた柔和な笑みを浮かべながら、ロイヤルスイートの絨毯に唾を吐き捨てる。そして今度は馬鹿にするかのような嘲笑を浮かべると、ハマダに向けて舌を出しながら左手の中指を立てた。

そんなトリスタンを見詰めながら、ハマダはこの男の危険性に気付く。この男は利に聡く冷静沉着であり、交渉事を得意とし、セルフコントロールにも長けている。だが根の部分で彼は酷く幼稚だ。気に食わない相手には、それがどれだけ巨大な相手であれども噛み付く。

こんな幼稚な思考を持つ者に、どうしてこれほどの知性を与えたのか。どうやら神という何者かは酷く愚からしい。だがそういう思考の持ち主でなければ、いくら会長の孫であれマクニール財閥の全資産の半分を盗みスラムに逃げるなんて無謀はしないだろう。どこか壊れている、そんな人間でなければ、トーキョー最大の財閥を敵になんぞ回しはしない。

「宣戦布告、そう考えていいのだな」

「お前らとマトモな交渉ができるなんざ思っちゃいねえよ。何が上は糞だ。お前らなんざあその糞に集る蛆虫みてえなもんじゃねえか」

「その蛆虫にすら劣る貴様らはなんだ」

「俺らは他人の糞才食ってまで生きようとは思ってねえ。獲物は自

分で狩る」

「ガキの戯言だな」

ハマダはロイヤル・ファミリーの強大きさをよく知っている。そして企業政府が有する政府軍の巨大さもよく知っている。例えば命の危険なんぞ一厘も感じたこともない漬垂れ小僧に、酷く殴られ蹴られ罵られ唾を吐き付けケツを握られようと、それでも耐えなければならぬ。理由は単純な力の差だ。その差を実感する度に絶望すら覚えた。それは大人と子供の喧嘩、いや大人と赤子の喧嘩にもならないだろう。

「あんた、いつまでハブリチエツクみたいな漬垂れ小僧に好き勝手やらせるつもりだ。荒くれ者揃いのポータウンエリアを力で押し伏せた頃のアんたはどこにいった」

「今はまだ時じゃねえ。それだけだ」

「あの小僧に牙ア抜かれてケツ掘られたんだろ。その背中般若も泣いてるぜ」

「ガキ、その辺にしとけや」

散々に辛辣な言葉を突き刺すトリスタンに対し、ハマダの眼が恐ろしいほどに尖る。それは先程のトリスタンがハマダに向けたそれとは全く異質だった。トリスタンのそれが幼稚で無邪気な狂気だとすれば、ハマダのそれは明確な意志を持った殺意だったからだ。

トリスタンは猛獣のように何の罪悪感も持たずに人を消すだろう。それは恐ろしいことではあるが、そこにハマダのような強い覚悟はない。ハマダは壮絶な抗争の中で練り上げ研ぎ澄まされてきた刀のようなものだ。

その刀身のような視線を突き刺され、トリスタンはふっと目を瞑ると口元をさも楽しげに

歪め小さくこう呟く。

「牙は失っていないらしい」

「貴様、わざわざそれを確認しやがったのか」

「この抗争、上の為に無駄なドンパチやるなんざ馬鹿みてえだとは

思わないか？」

「何を企んでやがる」

「ウチのシマに三番街ってところがある。フェンスにも近く荒れ果てていてな、参っているのさ」

トリスタンの意図するところに気付き、ハマダは不機嫌そうに眉間に皺を寄せると絨毯に唾を吐き捨てた。だがそうすることが最も犠牲が少ない、それもまたハマダは理解していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0953v/>

驕れ骸よ

2011年12月18日03時52分発行